

# 高松市内遺跡発掘調査概報

—平成11年度国庫補助事業—

2000年3月

高松市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、高松市教育委員会が平成11年度に国庫補助事業として実施した高松市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
2. 本書には、平成11年度の調査である公共工事にともなう確認調査2件、民間開発に伴う確認調査3件、遺跡確認調査1件のほか平成7年度から実施している史跡天然記念物屋島基礎調査事業として行った埋蔵文化財の確認調査について収録した。
3. 調査は高松市教育委員会文化部文化振興課 文化財専門員 川畠聰、同 山元敏裕、同 大嶋和則、同 小川賢が担当した。
4. 本書の執筆は各調査担当者が行ったほか、横立山経塚古墳の埴輪については大野宏和（花園大学学生）が行った。全体編集は山元が行った。
5. 本書の挿図の一部に建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図を使用した。
6. 調査の実施にあたっては、香川県教育委員会文化行政課、環境庁自然保護局瀬戸内海国立公園高松管理官事務所、四国森林管理局香川森林管理事務所、屋島寺、丹羽佑一、大久保徹也、伊達宗泰、高木恭二、間壁忠彦、伊澤肇一、竹田宏司、広瀬和雄の指導、協力を得た。

## 目　　次

第1章 高松市内遺跡発掘調査事業 .....	1
由良南原遺跡 .....	2
タヌキ塚 .....	3
高野磨寺 .....	6
東中筋遺跡 .....	7
日山山頂地区 .....	8
横立山経塚古墳 .....	9
第2章 史跡天然記念物屋島基礎調査事業 .....	31
1 平成7~10年度調査概要 .....	31
2 平成10年度発掘調査 第2調査地点（北嶺） .....	33
3 長崎鼻古墳 .....	35
4 平成11年度調査 .....	41

## 挿図目次

第1図 平成11年度高松市内遺跡調査地位置図	1	第15図 くびれ部(第2トレンチ)平・立面図及び断面図	19
第2図 山良南原遺跡調査地位置図	2	第16図 後円部(第3トレンチ)平・立面図及び断面図	21
第3図 タヌキ塚調査地位置図	3	第17図 横立山経塚古墳出土遺物実測図(1)	22
第4図 タヌキ塚周边地形測量図及び土層図	4	第18図 横立山経塚古墳出土遺物実測図(2)	23
第5図 タヌキ塚出土遺物実測図	5	第19図 横立山経塚古墳出土遺物実測図(3)	24
第6図 高野庵寺調査地位置図	6	第20図 横立山経塚古墳埴丘復元図	28
第7図 東中筋道跡調査地位置図	7	第21図 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査地位置図	32
第8図 日山山頂地区調査地位置図	8	第22図 平成10年度調査地出土遺物実測図	33
第9図 日山山頂地区出土遺物実測図	8	第23図 平成10年度調査地遺構配置図	34
第10図 横立山経塚古墳調査地位置図	9	第24図 長崎鼻古墳埴丘測量図(折り込み)	37
第11図 横立山経塚古墳地形測量図(折り込み)	11	第25図 第10トレンチ平面図	39
第12図 横立山経塚古墳トレンチ配置図	13	第26図 主体部トレンチ平・断面図	40
第13図 前方部平・立面図(折り込み)	15		
第14図 前方部埴丘上層図及び断面図(折り込み)	17		

## 写真目次

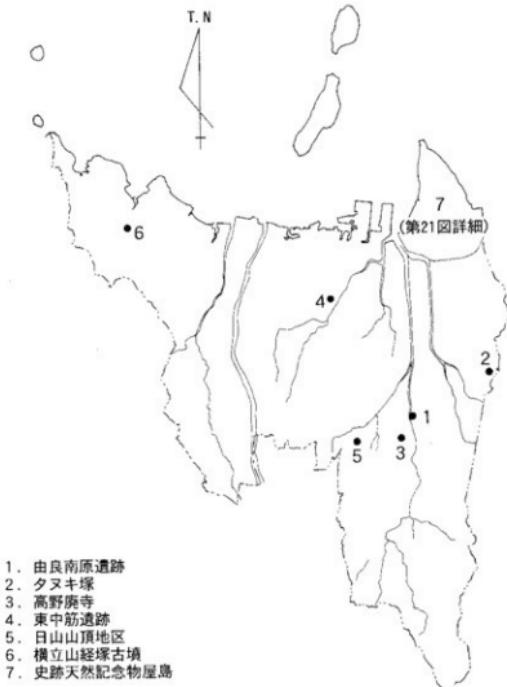
写真1 第7トレンチ全景	2	写真9 展望台予定地内トレンチ	8
写真2 第5トレンチ全景	2	写真10 トレンチ完掘状況(西から)	33
写真3 第1トレンチ完掘状況	3	写真11 石列検出状況(南から)	33
写真4 タヌキ塚全景	3	写真12 南嶺東側外郭縁現況(北から)	42
写真5 磯石群全景	6	写真13 南嶺東側外郭縁現況(南から)	42
写真6 士坑全景	6	写真14 東側外郭縁透前面石積み	42
写真7 第1トレンチ土層堆積状況	7	写真15 浦生遺跡表探遺物	43
写真8 第3トレンチ遺構確認状況	7		

## 図版目次

図版1-1 横立山経塚古墳遠景(南から)	図版7 横立山経塚古墳出土埴輪
2 同 遠景(北から)	図版8-1 長崎鼻古墳前部北側葺石検出状況(北から)
3 前方部調査前状況	2 同 (南から)
図版2-1 くびれ部調査前状況	3 前方部南側葺石検出状況(西から)
2 後円部調査前状況	図版9-1 南側くびれ部葺石検出状況(南から)
3 後円部竪穴式石室壙掘坑	2 くびれ部中段葺石状況
図版3-1 前方部積石検出状況(北から)	3 北側くびれ部葺石検出状況
2 同 (拡大)	図版10-1 前方部南側面葺石検出状況
図版4-1 前方部トレンチ内安山岩検出状況	後円部南側面葺石検出状況
2 同 土層	3 後円部北側葺石検出状況
3 前方部東側確認石列	4 後円部東側葺石検出状況
図版5-1 くびれ部積石検出状況(南から)	図版11-1 くびれ部埴頂敷石検出状況
2 くびれ部埴輪出土状況	2 後円部主体部トレンチ壺掘坑除去状況
図版6-1 くびれ部積石検出状況(北から)	3 主体部石棺検出状況
2 後円部積石検出状況(北から)	

## 第1章 高松市内遺跡発掘調査事業

平成11年度高松市内遺跡発掘調査事業では7件の確認調査を行った。このうち公共工事に伴う確認調査は2件、民間開発に伴う確認調査は3件、遺跡確認調査は1件と史跡天然記念物屋島基礎調査事業として行った確認調査の1件である。高松市内遺跡発掘調査事業として確認調査を行った6件のうち4件は遺跡としては認められず、開発予定地内における文化財保護法に基づく事前の保護措置は不要であるとされた。残る2件のうち山良南原遺跡は市営住宅建て替えに伴う確認調査で、調査の結果、溝、柱穴、土坑等を確認した。出土した遺物から鎌倉時代から室町時代の構造と考えられる。東中筋遺跡は都市計画道路建設に伴う確認調査で、平成9年度の確認調査で遺跡が確認され平成11年度に発掘調査を実施しているが、その調査地の北側の隣接地で行った今回の確認調査では、北部は遺構・遺物は確認されなかつたが、南部ではピット、土坑を確認したほか弥生土器片を確認したことから平成11年度の発掘調査地と同様に弥生時代の集落が広がっているものと考えられる。これらの2件については、平成12年度以降に事前の発掘調査を実施する予定である。



第1図 平成11年度高松市内遺跡発掘調査事業調査地位置図

ゆらなんばらいせき  
由良南原遺跡

1. 所在地 高松市由良町339番地ほか

2. 調査期間 平成11年7月26日～27日

平成11年8月17日～23日

3. 調査担当者 川畠 聰

4. 調査の原因 市営住宅建て替え

5. 調査結果の概要

由良南原遺跡は、市営住宅建て替えに伴う試掘調査により、新たに発見された埋蔵文化財包蔵地である。春日川中流域の東岸に位置し、遺跡はこの春日川により形成された埋没旧中洲上に立地する。

調査は2回に分けて実施した。第1次調査は機械掘削により調査地の地形や遺物の有無を確認し、第2次調査では、人力掘削により遺構の検出を行った。

調査の結果、川東市営住宅敷地において、西半分が埋没旧中洲(微高地)であり、東半分が旧河道であることが判明した。この旧河道は、付近の地形分析とあわせて春日川の旧流路と考えられる。一方、埋没旧中洲上では、黒褐色粘質土の遺物包含層を確認するとともに、溝跡4条、柱穴7個、土坑2基の遺構を検出した。これらの遺構は、出土遺物より鎌倉～室町時代を中心とするものと考えられる。注目すべき遺物としては、焼土塊と鉄屑が溝跡より出土しており、この場所において、鉄器製作が行われていた可能性が指摘できる。また、1点のみだが、弥生時代の石鏃が出土している。

6.まとめ

由良南原遺跡については、埋蔵文化財包蔵地と認められることから、平成12年度に開発に伴う事前の発掘調査を実施する予定である。

また、当該遺跡は、中世城館であった由良城が北方に近接し、由良山城が春日川を挟んだ対岸にあったこと、鎌倉～室町時代にかけての土器片が出土したことから、両城に關係した施設が所在していた可能性が指摘できる。



第2図 由良南原遺跡調査地位置図

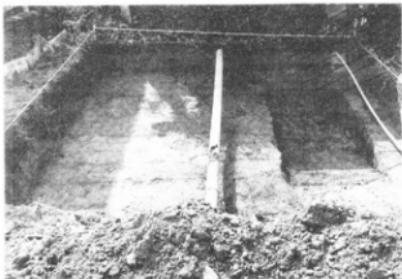


写真1 第7トレンチ全景



写真2 第5トレンチ全景

## タヌキ塚

- 所在地 高松市前田東町339-1
- 調査期間 平成11年8月2日～8月3日
- 調査担当者 大嶋和則
- 調査の原因 園場整備事業
- 調査結果の概要

園場整備事業を着手するにあたり、事業者から開発予定地内に塚が所在するため埋蔵文化財であるか否かの調査を行って欲しいという依頼を受けた。周知の埋蔵文化財包蔵地としては認知されていなかったが、平成11年7月21日に現地の現状確認を行った。塚はタヌキ塚と呼ばれ、棚田の畦畔上に築かれており、長辺4.5m、短辺3.5mの隅丸方形を呈し、2mの高さに礫混じりの盛土がみられた。周囲には金石古墳群や平尾古墳群といった小円墳が分布する地域であるため、タヌキ塚についても古墳となる可能性があったため試掘調査を行うことで事業者と合意した。

試掘トレンチは塚の中央から南側と西側の2方向掘削しており、それぞれ1Tr、2Trとした。塚は2層に分層でき、下層に径15～30cmの比較的大きめの礫を用い、上層は径5～10cmの礫が緩く積み重なった状況である。盛土内の遺物は弥生時代～近代のものまで混在しているものの、盛土下層からは陶磁器が出土しないことから、中世末頃下層の塚を作った後、徐々に上層の盛土を行っていたと考えられる。

### 6.まとめ

調査地の地山が礫混じりの粘土層であることから、棚田開墾時に邪魔な礫や遺物等を畦畔上に固めたものと考えられる。このため、遺跡とは認められず、本調査の必要はない判断した。

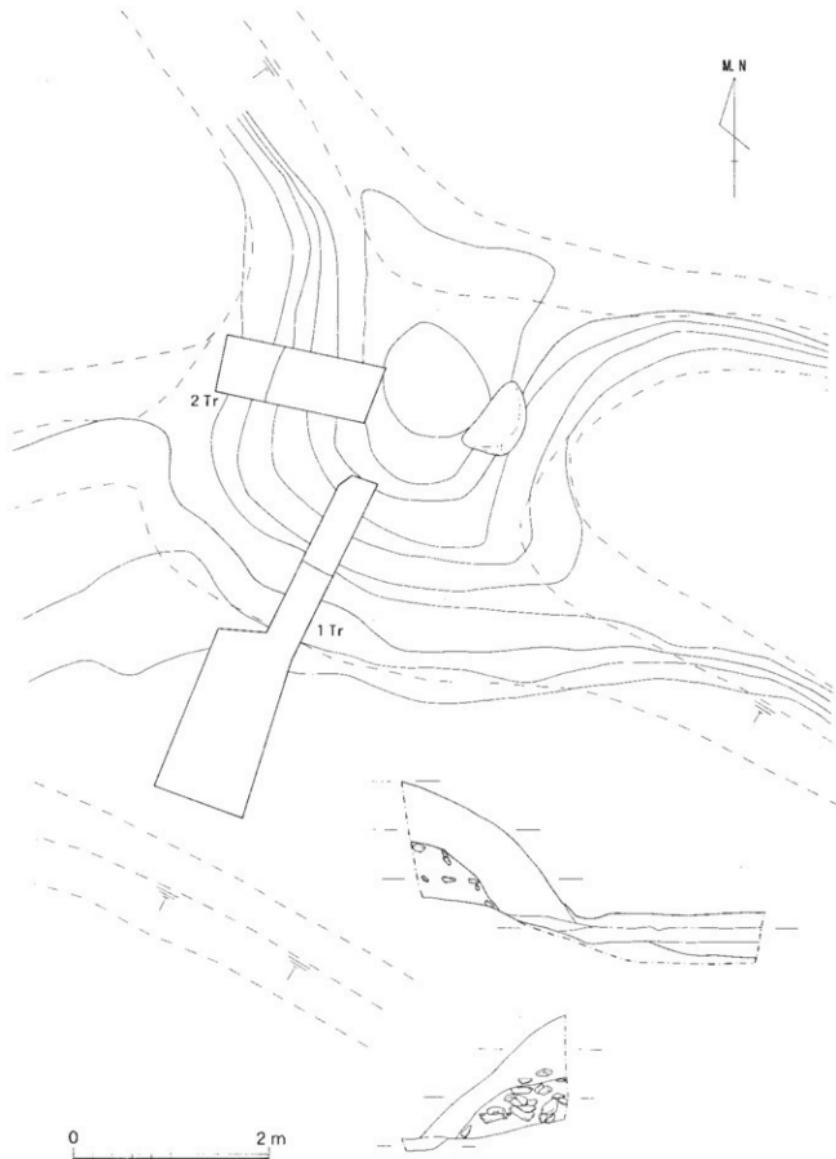
なお、遺物中には弥生土器、須恵器、瓦、埴輪等が出土しており、棚田開墾時に幅広い時期におよぶ複数の遺跡から集石されたことが考えられる。



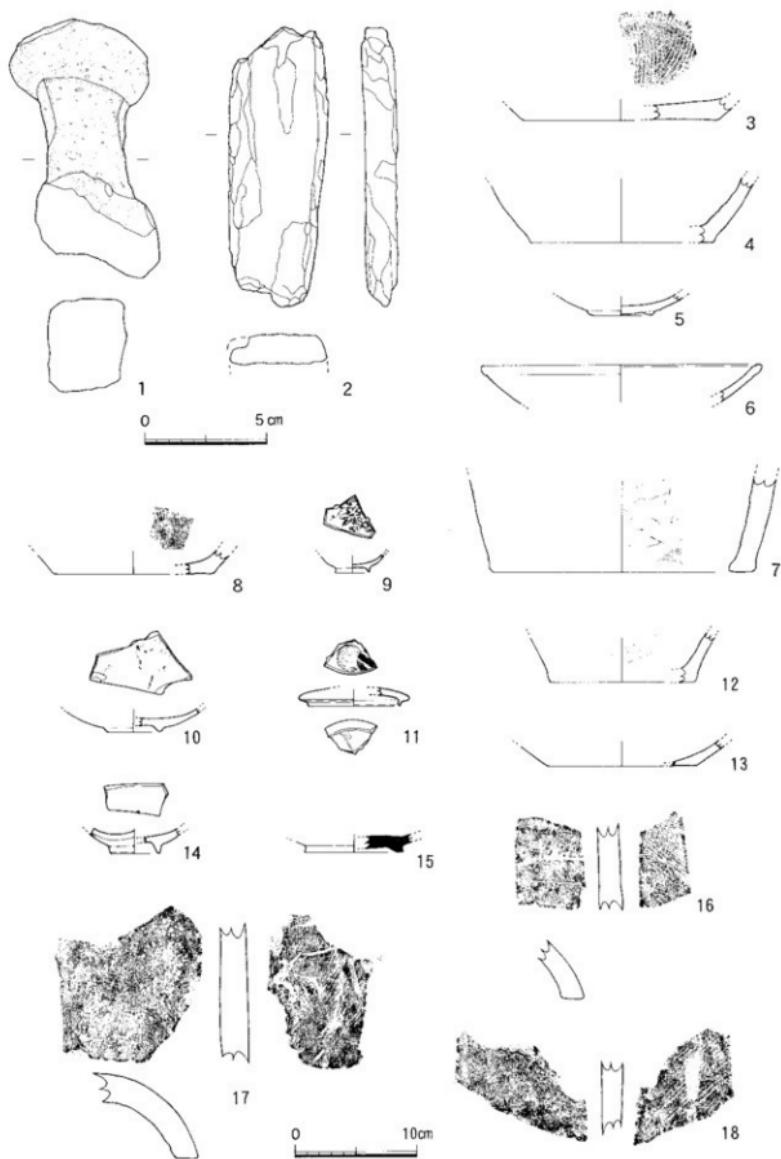
▲写真3 第1トレンチ完掘状況



写真4 タヌキ塚全景 ▶



第4図 タスキ塚周辺地形測量図及び土層図



第5図 タヌキ塚出土遺物実測図

こうやはいじ  
高野廃寺

1. 所在地 高松市川島本町728番地
2. 調査期間 平成11年10月12日～15日
3. 調査担当者 川畠 聰・小川 賢
4. 調査の原因 薬師堂建て替え
5. 調査結果の概要

高野廃寺は、白鳳期から平安時代までの古瓦を出土する包蔵地として古くから知られており、包蔵地内にある丹生明神境内には礎石の存在も指摘されている。今回の調査対象地は、包蔵地の南東隅にあたるが、この場所は、包蔵地が所在する丘陵の南面と東面を直線状に削った角地にあたる。旧薬師堂の解体後、調査を実施した。

L形や四角形のトレーナーを2本設定した。5～30cm掘ると地山である明黄褐色粘土層に到達した。検出した遺構は、旧薬師堂に伴う礎石と土坑などである。礎石は、約40cm大の平坦面をもつ石を等間隔に並べており、すでに失われたものを含めると4×4列となり、礎石の上の建物は1間半×1間半に復原できる。土坑は、旧薬師堂北側に隣接する位置にあたり、薬師堂と方向を同一にした東西方向に長い隅丸方形を呈する。この土坑は、長さ約1m10cm、幅約50cm、深さ約1mを測り、黄灰色砂質シルトを埋土とし、底近くより江戸時代と推定される陶磁器破片が出土した。

#### 6.まとめ

旧薬師堂は、保管されている棟札より、安政6年に再建され、明治41年に増築されたことを知ることができる。棟札の記載や陶磁器破片より、検出した礎石と土坑も、旧薬師堂と同じ時期の所産つまり江戸時代のものと考えられる。また、この薬師堂に祀られている石製の薬師如来像は、風化が著しいものの、鎌倉～室町時代のものと想定される。この薬師如来像は、付近より掘り出されたものとの伝承があり、その際にこの地に堂宇を立てたものであろう。



第6図 高野廃寺調査地位置図



写真5 磚石群全景



写真6 土坑全景

ひがしなかすじいせき  
**東中筋遺跡**

- 所在 地 高松市桜町二丁目14番地
- 調査期間 平成11年10月26日、28日
- 調査担当者 小川 賢
- 調査の原因 市道東浜港花ノ宮線建設工事
- 調査結果の概要

試掘の対象面積は約1,470 m<sup>2</sup>で、対象となる箇所は、同路線上で平成9年度に試掘調査を行い弥生、古墳期の埋蔵文化財包蔵地であることが確認され、今年度に実施する発掘調査予定地の北に位置する。当試掘調査では、南北方向にトレンチを3つ設定し、約90 m<sup>2</sup>を重機により掘削した。北部に設定した第1トレンチ、中央部の第2トレンチでは地表面から約2mまで掘削を行った。その間に水田層と考えられる

黒褐色シルト層及び灰褐色シルト層が繰り返し見られたが、畦畔等の遺構及び遺物を確認することはできなかった。南部の第3トレンチでは、黄灰色シルト質極細砂埋土のビット、土坑を検出したほか、下層の黒褐色シルト層からは弥生土器片等が数点出土した。

#### 6.まとめ

各トレンチの堆積状況から、調査対象地は南西から北東方向に向かう旧河道域内に位置すると考えられ、川底は北端の第1トレンチで最深を測り、徐々に上昇し、第3トレンチの南では微高地が想定できる。また水田層とみられる土壤層を確認していることから、平成11年度の調査地である微高地上の集落に関連した生産域と推察できる。

第1トレンチと第2トレンチでは、遺構及び遺物を確認できず保護措置は不要と認められるが、第3トレンチの南部についてはビット、土坑、弥生土器片を確認しており、道路建設工事に先立ち文化財保護法に基づく事前の保護措置が必要と考えられる。



第7図 東中筋遺跡調査地位置図



写真7 第1トレンチ土層堆積状況



写真8 第3トレンチ遺構確認状況

ひやまさんちょううちく  
日山山頂地区

1. 所在地 高松市三谷町2007番地22
2. 調査期間 平成11年11月17日
3. 調査担当者 小川 賢
4. 調査の原因 遊歩道、展望台建設工事
5. 調査結果の概要

遊歩道、展望台等建設予定地内で試掘の対象とした箇所は、周知の埋蔵文化財包蔵地である日山山頂古墳及び日山山頂経塚が位置する日山山頂である。山頂部は平坦であり、地表観察では、墳丘らしきマウンドや石礫等は見られない。展望台建設予定地及び地図上の等高線により遺構の想定できる地点の2箇所にトレンチを設定し、約1.2m<sup>2</sup>を人力により掘削を行った。

両トレンチとも10cm前後の腐葉土、5~10cmの黄灰色極細砂層の下で、浅黄色の地山を確認している。第2層の黄灰色極細砂層からは壺、甕と思われる須恵器片及び土師器片が数点出土したが、設定した2つのトレンチで、遺構を確認することはできなかった。このうち須恵器壺は、ヘラ切りされた高台の付かない平らな底部で、体部は直線的に外上方に延びており、9c後半頃のものと考えられる。他は、小片で詳細は不明である。

#### 6.まとめ

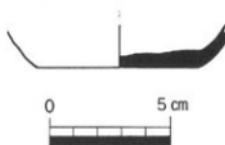
今回の調査では古墳及び経塚等の遺構を確認できず、また出土した遺物についても、古墳や経塚に直接関連付けられるものではない。よって山頂部の展望台等建設予定地において、文化財保護法に基づく事前の保護措置は不要と考えられる。



第8図 日山山頂地区調査地位置図



写真9 展望台予定地内トレンチ



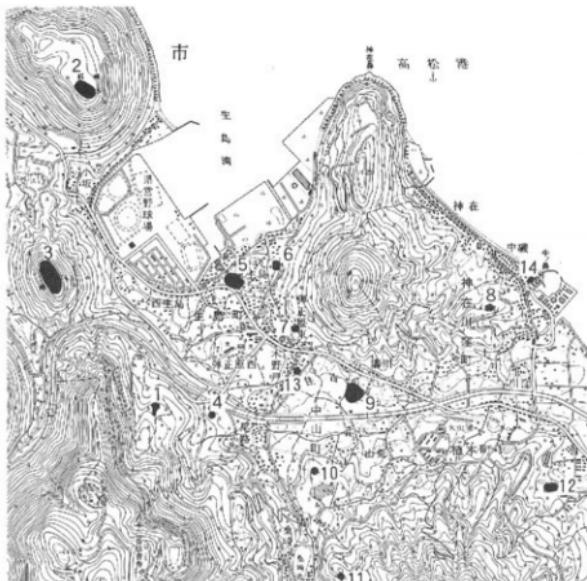
第9図 出土遺物実測図

よこたてやまきょうづかこふん  
横立山経塚古墳

1. 所在地 高松市生島町423-62他
2. 調査期間 平成11年8月17日～12月1日
3. 調査担当者 山元敏裕
4. 調査の原因 墳丘一部損壊による範囲確認
5. 調査の経緯

平成10年3月24日に香川県教育委員会文化行政課から、市内下笠居の横立山経塚古墳が開発行為により墳丘が損傷しているらしいとの連絡があり、現地を確認に行くよう指導があった。

翌3月25日午後、市教育委員会文化振興課文化財担当者が現地の確認を行ったところ、「コンクリートの土台」「後円部の擾乱、削平」「土砂の積み上げ」等が確認された。ただし、後円部の削平については現状が消失するほどの大規模なものではなく、前方部については、コンクリート舗装道路の進入や出所不明の土砂が多量に堆積している状況が確認された。



- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1. 横立山経塚古墳  | 8. 住吉神社古墳 |
| 2. 亀水城跡     | 9. 中山城跡   |
| 3. 黄峰城跡     | 10. 原経塚古墳 |
| 4. 横立山東麓1号墳 | 11. 桑崎古墳  |
| 5. 西畠遺跡     | 12. 勝賀廣寺  |
| 6. 浜津神社南遺跡  | 13. 木野戸古墳 |
| 7. 弹原正古墳    | 14. 坊主山古墳 |

第10図 横立山経塚古墳調査地位置図

その後の確認によって、元から後円部墳丘上に存在していた祠の損傷がひどくなつたため地元有志で整備を図つてることが判明した。

この遺跡については、地元住民の多くが塚（＝祠）としてとらえており、今後、周知の埋蔵文化包蔵地としての正確な情報を周知するためには、古墳としての状況を確認する必要があるとの結論に至つた。

平成11年度に入り地元関係者との間で、横立山経塚古墳の確認調査を行うことで同意を得、調査を実施したものである。

#### 6. 調査の経過

今回の発掘調査が範囲確認を目的の調査であることから、トレーニングの数は必要最小限度にとどめた。

また、古墳の現況を確認するために、土地所有者の承諾を得られた範囲において墳丘測量及び周辺の地形測量を実施した後、各トレーニングの調査を行つた。

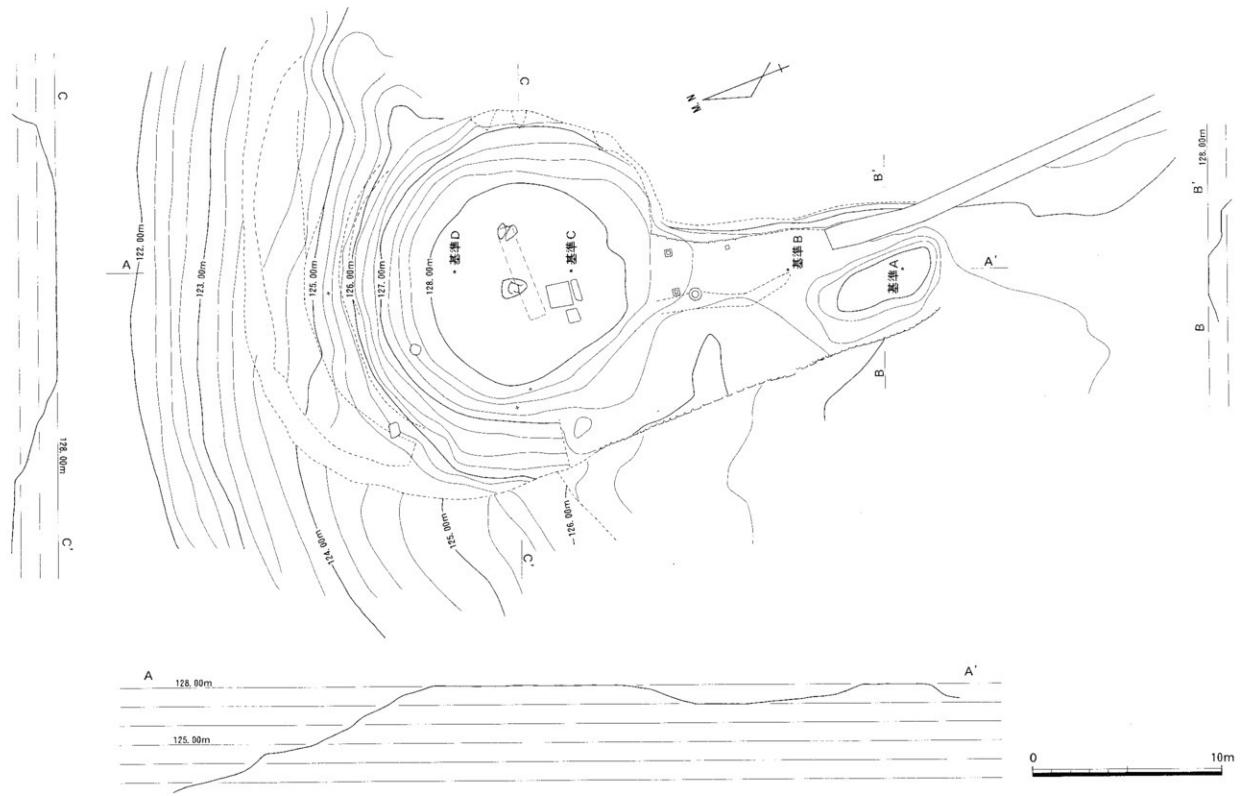
発掘調査の結果、古墳の状況がほぼ判明した10月6日に地元の方を中心に50名の参加を得て、現地説明会を実施した。また、今回確認できた成果については、平成11年度において古墳の概要を記した説明板を設置した。

#### 7. 調査の成果

##### (1) 墳丘の調査

昭和54年に香川県教育委員会が重要遺跡確認調査の一環として墳丘及び周辺部の測量調査を実施しており、詳細な測量図が公表されている。<sup>(1)</sup>今回の調査の実施にあたっては、①発掘調査の経緯として、後円部墳丘部分に祠を建設したことによる墳丘の損壊が原因の調査であること。②一部の地形測量は行えないという制約はあるものの、以前の測量図と対比することによって損壊している程度の確認が行えること、③公表されている測量図に、今回確認調査を行つたトレーニングと墳丘測量図を照合するための基準となるポイントが明記されていないことから、今回確認調査を行つたトレーニングの位置を、図面上に正確に反映させるため、再度地形測量を実施することとなった。測量図を作成した結果、後円部の祠の基礎周辺を除けば、昭和54年当時とそれほど変わらない状態で残存していることが判明した（第11図）。

今回の測量図の成果として、後円部の標高127m～126.75mの等高線あたりに、やや傾斜は見られるものの、他の後円部の傾斜に比べて緩やかな部分が認められたことから、テラス部分があると想定した。このテラスと想定した平坦面は前方部に向かってやや標高を上げ、その後不明瞭に収束する。後円部の傾斜は、標高125mあたりで緩やかになり、標高124.75mより下で、約1mほど傾斜している状況が認められた。昭和54年の香川県教育委員会の測量図では、この平坦面から下側を古墳の一段目と想定し、この平坦面から上を2段目として2段築成の前方後円墳と想定している。今回の測量調査から導き出される成果として、後円部北側の傾斜に対して、昭和54年の測量図にある一段目のテラスとした部分が、古墳の全長を考えた場合、あまりにも広くとられている点が上げられる。確かに、後円部は地形の傾斜する部分に築かれてはいるものの、これほどまでに平坦面をつくる必要はないものと思われる。古墳の裾とした傾斜変換点も、平面形状からは弧を描かず、いびつであることなどから、今回の測量調査の結果から、一段目のテラスとしていた標高125mの裾を古墳の墳裾と想定した。このラインを墳裾とした場合、古墳周辺の地形が大きく傾斜する後円部中央あたりまでこのラインがつづき、それより以南は認められないことから、正円ではないものの、古墳の裾が、きれいな弧を描くことが認められる。このことから古墳の一段目は後円部の北半だけに築



第11図 横立山経塚古墳地形測量図

かれ、2段目が前方部につながる2段築成の古墳であると想定できる。くびれ部については、西側くびれ部据と想定できる標高127.25mのラインと、以前から大きく削平されていると想定されていた東側くびれ部幅の標高127.25mのラインとの、左右の位置関係が、さほどずれない位置にくることが観察される。前方部西側の埴裾は、くびれ部からつづく標高127.25mが、最も妥当であり、前方部南西に存在する集石に影響されて西側に反れているが、本来は南側に続くものと考えられる。一方、東側前方部埴裾は126.75mのコンターラインあたりに想定できる。前方部両裾の想定ラインでは東西で0.5mの差が認められ、一部削平も考えられるが、これは前方部の立地が南西から北東に向かって緩やかに傾斜する地形につくられていることに起因するものと考えられる。

今回の、墳丘及び周辺部の地形測量からは以上のような成果が確認された。以下各トレンチの概要を述べる。

## (2) トレンチの調査

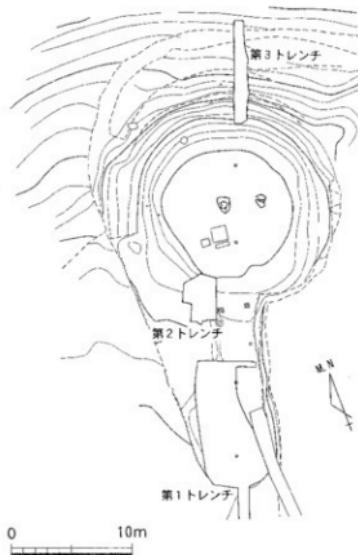
墳丘及び周辺部の測量調査の結果から、当初前方部前面に1ヶ所、くびれ部に1ヶ所、後円部北側に1ヶ所、後円部北東部に1ヶ所の合計4箇所のトレンチを予定していたが、測量調査などの結果と、掘削土が予想以上に多く想定できることに加えて、掘削土の仮置き場の関係から、後円部北東のトレンチを行わず、新たに前方部側縁部にトレンチを設定することに変更した。その後、調査の進展に伴い前方部南東部に存在する集石を除去した関係で、前方部に設定したトレンチはすべて連続することとなった。

### ① 第1トレンチ（前方部）

前方部に設定したトレンチである。調査当初は前方部前端部と西側縁部にトレンチを設定していた。前方部に設定したトレンチでの土層観察の結果、前方部上部に盛られている石は、他の残存している古墳の積石に比べて小振りであることに加え、古墳に伴う積石の間には土が充填されているのに対して、石と石の間に隙間がみられるなどから、前方部の残存と考えられていた集石の上部は、後世に積まれていたことが判明した。その後前方部上に積まれていた集石を取り除いたことにより、2つのトレンチは連続することになった。

#### 積石状況

くびれ部寄りのトレンチ北端から南へ2mまでは、基底石のみの一段で、北端から4.4mまでは2段程度の積石になる。基底石の規模は長軸50cm、短軸30cm程度の長方形状の割石を基本とし、基底石のレベルは標高127.00～127.05mと一定している。平面上でそれまで直線的であった前方部は、トレンチ北端から4.4mで緩くバチ形に開く、この平面プランの変換点では、平面形態の変化に加えて側面部の変化も観察できる。この変換点から裾石の規模も長軸80cm程度



第12図 横立山経塚古墳トレンチ配置図

の大振りな割石が2石連続して使用するが、その南側の裾石は小振りの裾石2石を使用し、その南は再び長さ80cmの大振りな割石を使用する。長さ80cmの大振りな割石の使用は、この3石のみであり、再び裾石は、長さ30cm程度の規模の石を使用するなど、裾石の規模については一定ではない。裾石より上部の積石はA-A'の断面では裾石に面を合わせるように2石垂直に積み上げ、それより上部は緩やかな傾斜で積み上げている。最も高く積み上げている部分で裾石基底部から80cmの高さまで石を積み上げている。それより上部は積石は存在せず、墳丘の土が露出する状況であることから、後円墳頂部の状況から、本来はこれよりも前方部の墳丘が高く積石が墳頂部も覆っていたものと考えられる。裾石同様上部の積石の規模については、バチ形に開く変化点から南へ3m程度は20cm程度の安山岩を使用し、一定のまとまりはみられるが、前端部にいくに従い、使用している積石が小振りになる。前方部前面の積石については、裾石と考えられる石が前端部裾にみられるが、前方部西側側縁のように列にならないこと、裾石のレベルも一定ではないこと、裾石上部に積み石が見られないことなどから削平された可能性も考えられる。

前方部東側では、明確な積石は現段階では確認できないが、安山岩の板石を2枚直線に並べ、東側から30cm大の安山岩で押さえている状況が確認できた。西側の積石は古墳主軸に対してバチ形に開くのに対して、東側の石列は主軸に平行することから積石の一部とは考えにくい。前方部に設定したトレンチの十層では、板石を設定するための新たな掘り込みは確認できず、墳丘の土層が板石まで連続していることから、この石列は墳丘と一緒に造られていることが確認できた。次にこの石列の用途であるが、この規模の安山岩の板石は箱式石棺の棺材として利用されていることが多い、この石列が箱式石棺の石材だと仮定するならば、石材の出土状況および墳丘土層から、この石列より西側には石列は想定できないことから石列は西側の棺材と仮定できる。この仮定からすれば、石列の東側は棺の内側となる。本来遺体を安置する為には内側に20cm程度の高さが必要であるが、棺の内側であるはずの板石東側の上部近くに押さえの石があることから（第14図）、箱式石棺の板石とも考えられず、この石列の用途は今回の確認調査では明らかに出来なかった。

#### 盛土構築状況

今回の発掘調査が、墳丘の範囲確認を目的とした調査であることから、良好に遺存している積石を除去することはせず、積石が存在しない前方部に、墳丘に埋没している可能性のある積石の確認と墳丘東側で確認した板石の構築状況を確認する目的でL字形のトレンチを設定し、墳丘土層の確認を行った。

墳丘主軸ラインに設定した南北のトレンチでは、トレンチ下部で、基盤層と考えられるしまりのよい浅黄色土が存在する。この基盤層は前方部西側で、裾石の基底部を確認するためのトレンチでも認められ、風化の進む安山岩を多く含む層である。トレンチ内で認められる安山岩はこの層からの出土である。基盤層から上では、にぶい黄橙色土（10YR 6/3）と浅黄色土（2.5YR 7/4）が交互に認められ、一部にきめの細かな灰白色土がブロック状に認められる。いずれの土層も版築状につき固められたものか堅く締まり風化の進んだ安山岩を多く含む。

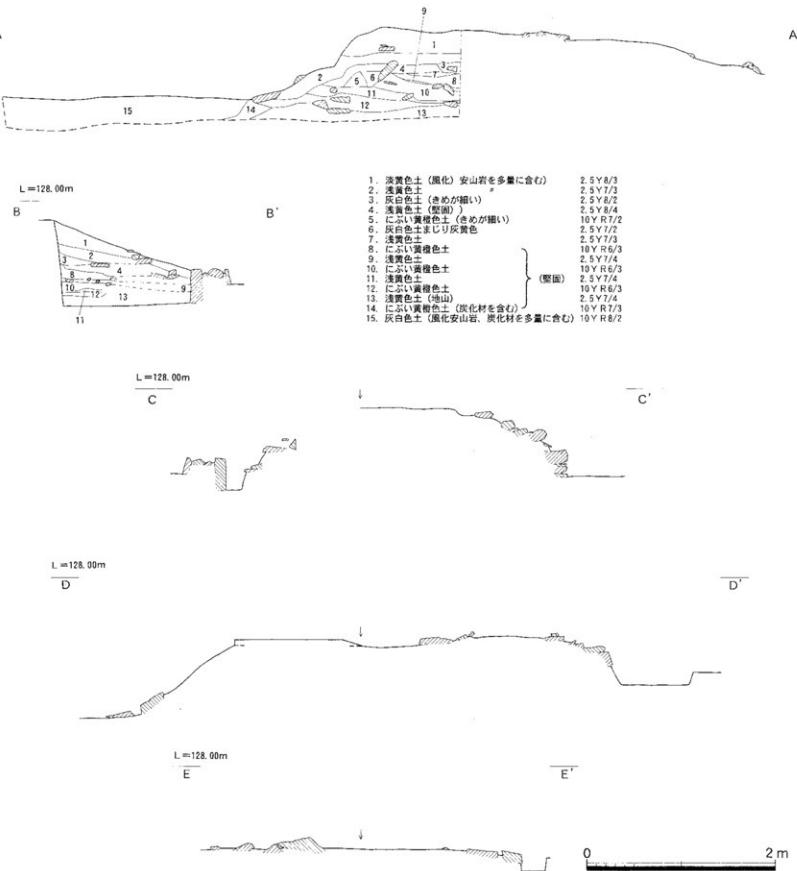
一方、東西トレンチでも、南北トレンチと同様に版築を行ったような土層が、東側で確認した板石まで連続している状況が確認できる。南北トレンチで確認できた基盤層である1-3層は板石付近では、認められないことから、古墳築造時、旧地形はこの付近から東に下っていたものと想定できる。

#### ② 第2トレンチ（くびれ部）

植栽の根による擾乱のため、一部原位置を保っていないものもあるが、前方部同様、基底石（根石）には50cm×20cm程度の安山岩を長辺を基底部裾ラインに合わせるように置き、基底石のレベ

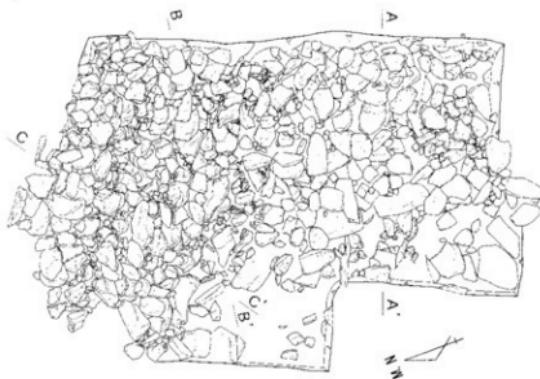


第13図 前方部平・立面図



第14図 前方部填丘土層図及び断面図

基準Cより南へ2m  
西へ1.5m



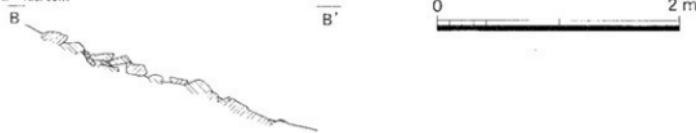
L=127.00m



L=128.00m



L=128.00m



第15図 くびれ部（第2トレンチ）平・立面図及び断面図

ルは標高127.05m前後とほぼ一定である。基底石の上部に20cm×20cm程度の石を積み上げ墳丘を築いている。

各積石の間は10cm角の板石を充填する。B-B' C-C' の断面ラインにおいては裾部から上部にかけて葺石の列が揃っている状況が確認できる。この石列は、石列に挟まれる積石に比べてやや大きめの石を利用して積まれていることから、積石を積む際の区画石列（目通り）であると考えられる。くびれ部では今回確認できた上記の区画石列以外は確認できなかった。

埴輪の出土状況は、トレンチ上部から基底部にかけて出土しているが、出土量は少なく、上部からの崩落と考えられる積石の下部から出土するものもあり、原位置を保っているものは見られない。

### ③ 第3トレンチ（後円部）

古墳の墳丘主軸に合わせ形で後円部斜面に設定し、主に埴輪の確認、段築の築成状況を確認するために調査を行った。

トレンチ設定前から、後円部墳頂近くの斜面部表面には積石が存在せず、墳丘の盛土が露出していたが、削平されているはずの墳頂平坦面では、安山岩が散在しているという変わった状況を呈していた。トレンチ内部も同様であり、トレンチ南端から1.5mの範囲については、原位置を保っている積石はほとんど認められず、盛土のみが認められる状況である。それから北側は10×20cm前後の積石が確認でき、トレンチ南端から1.8mで傾斜角度が変化し、それまでよりも急になる。トレンチ端から2.3m付近、標高125.6mで、他の積石よりも大きな横長の安山岩が、墳丘主軸に直交する形で並んで確認できたことから、この石を上段の基底石とした。上段の基底石の北側は0.8mの平坦部が認められ、平坦面には5cm角の板石が多く認められる。トレンチ端から3.3mで積石の傾斜が認められ、トレンチ端から3.9mで幅0.8mの平坦地となる。ここでも5cm角程度の安山岩の板石が認められる。これより北側には10×20cm前後の安山岩は認められるが、これより北側は積石が粗く、南側の積石よりも傾斜角度が緩くなることから、裾石と認識できるような大振りの石はないものの、トレンチ端から3.9mを後円部の埴輪とした。トレンチ端から4.7mで傾斜が始まり5.3mで平坦地となり、南端から6mで地山が確認できる。トレンチ端から6.8mで地山が急に傾斜し、トレンチ端から7.2mで平坦面となる。この急な傾斜は自然の地形ではなく、果樹園造成による削平と考えられる。

第3トレンチでの埴輪の出土状況は、崩落してきたと考えられる安山岩と土砂の間から破片は出土したが、いずれも破片であり、原位置を保っているものは認められなかった。

### （3）出土遺物

横立山経塚古墳からは今回の調査によって各トレンチおよび前方部の廃石中からコンテナ3箱分の埴輪片が出土した。そのうち今回はくびれ部（第2トレンチ）8点、後円部（第3トレンチ）5点、その他、前方部廃石中出土および表採品31点の埴輪片を図化した。

#### ① くびれ部（第2トレンチ）出土埴輪

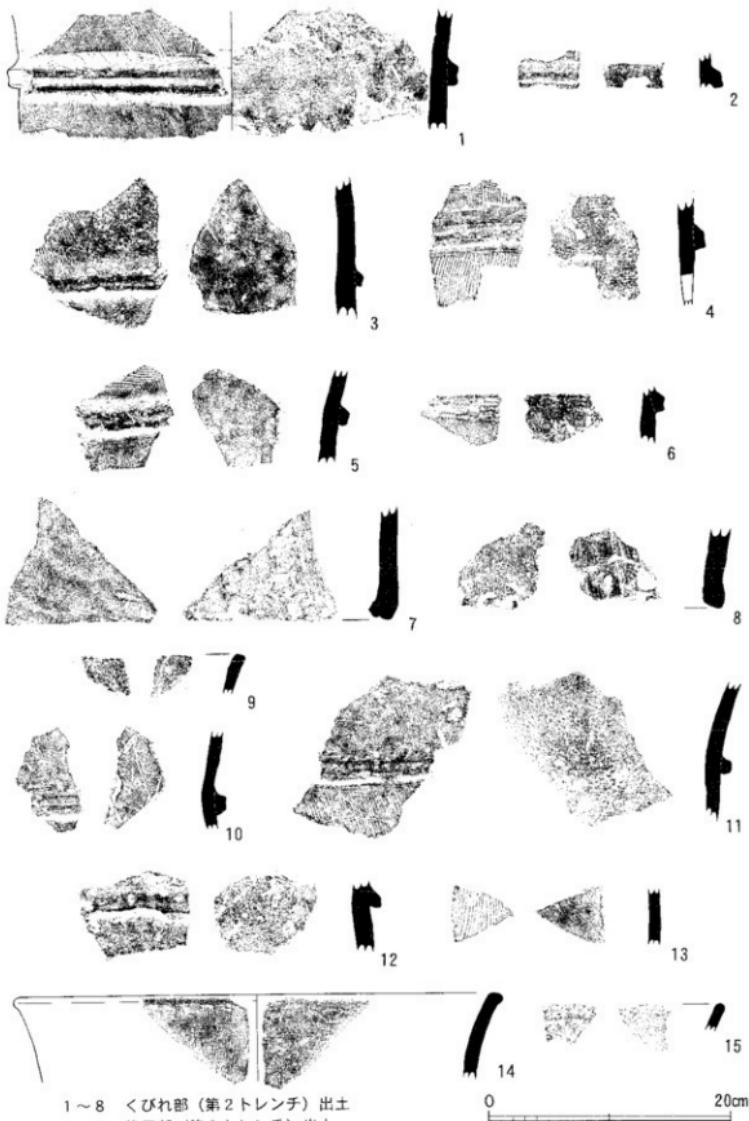
1～6は円筒埴輪筒部、7～8は基底部である。径がわかるものが少ないが、1では3.5cmを計る。

6は方形透かし孔の上部と思われるが、少し不正な形であったと思われる。突帯の形態については台形、若しくは低台形をなす。これらの接着については、上端に比べて下端の接着が粗雑であり、器体との間に隙間が出来ているが、1・6については若干きれいに撫で付けられている。

外側調整は1次のタテハケが基調であるが、1では一部にタテハケ後ナメハケ、5ではタテハケ後ヨコハケが施されているものもある。内面調整としては6においてヨコハケ、基底部の7・8において顕著な指押さえの跡が受けられる。



第16図 後内部（第3トレンチ）平・立面図及び断面図

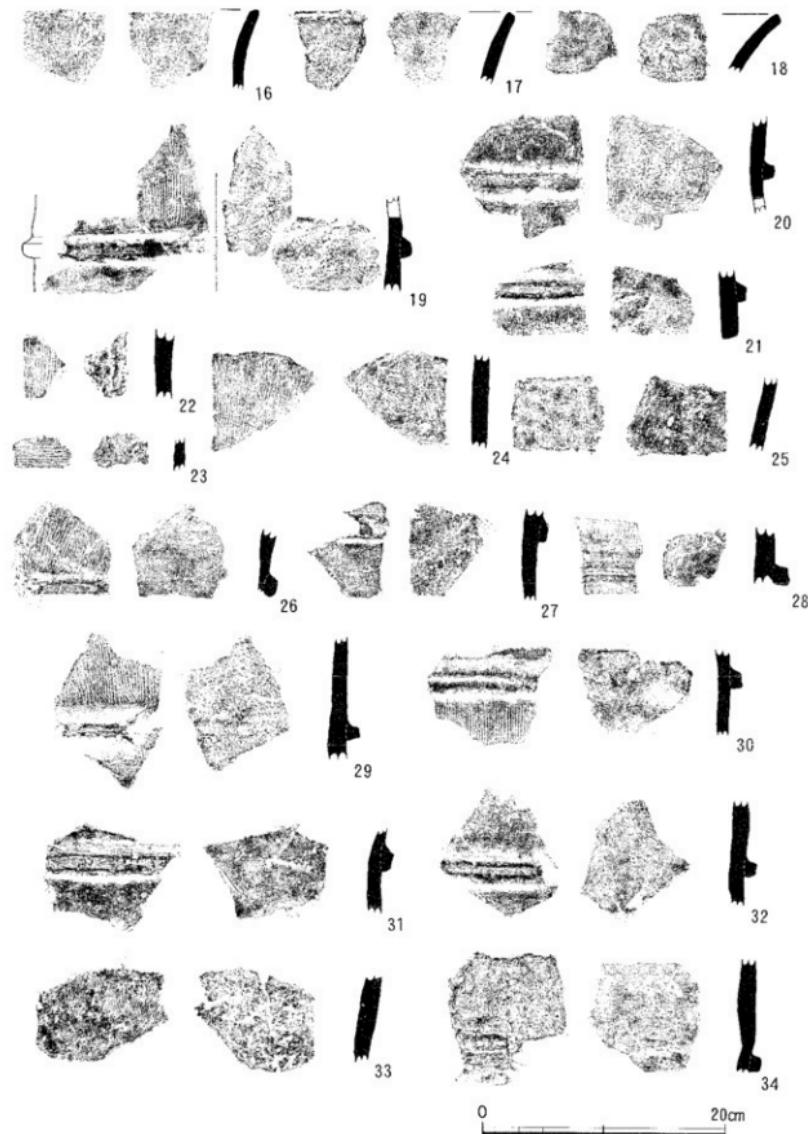


1~8 くびれ部（第2トレンチ）出土

9~13 後円部（第3トレンチ）出土

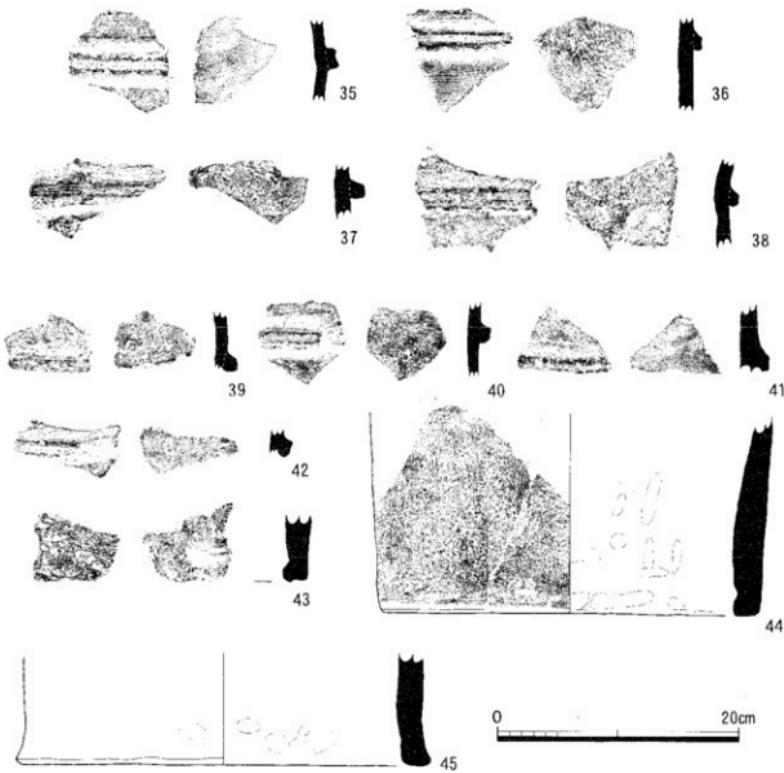
14~45 表面採集および前方部鹿石中出土

第17図 横立山経塚古墳出土遺物実測図（1）



第18図 横立山経塚古墳出土遺物実測図（2）

突帯の設定技法についてだが、基本的には凹線で設定されたと思われるが、6において突帯上部に櫛状の物での連続刺突痕が見受けられ、この連続刺突痕を目印として突帯の貼り付けを行った可能性もあるので指摘しておきたい。



第19図 横立山経塚古墳出土遺物実測図（3）

攝影圖版	器種	残存部位	口径	色調(外)色調(内)	黒斑	胎土	口縁部形態	透孔	突帯形態	外面調整	内面調整	その他
1	7 円筒埴輪	中位段	35cm	5YR6/8	5YR6/8	2 mm 大の石英少量、2 mm 大の角閃石を多量、赤色粒を含む。	偏平な台形 一部ナメハケ	タテハケ後 一部ナメハケ	指頭圧痕	指頭圧痕	朱	
2	8 中位段			5YR6/6	7.5YR7/6	1 mm 大の石英と角閃石と赤色粒を含む。	台形	ヨコナナデ				
3	9 中位段			5YR6/6	5YR6/6	1 mm 以下の石英・角閃石を含む。	台形上部上 方に突出する。	タテハケ	指頭圧痕			
4	9 中位段			5YR6/6	有り	1 ~ 2 mm 大の石英・角閃石を含む。	方形	タテハケ	ヨコハケ			
5	9 中位段			5YR6/6	5YR6/6	1 mm 以下の石英・角閃石と赤色粒を含む。	低台形	タテハケ後 ヨコハケ	指頭圧痕			
6	9 中位段			5YR6/6	5YR6/6	1 mm 以下の石英・角閃石を含む。	低台形	タテハケ	指頭圧痕	指頭圧痕		
7	9 基底部			7.5YR5/6	7.5YR5/6	2 mm 以下の石英・角閃石と赤色粒を少量含む。			タテハケ	タテハケ 指頭圧痕		
8	9 基底部			5YR5/6	5YR5/6	1 mm 以下の石英・角閃石と赤色粒を含む。			タテハケ	タテハケ ヨコハケ		
9	9 口縁部			7.5YR1.7/1	7.5YR6/6	3 mm 以下の石英を少量、1 mm 以下の角閃石を含む。						
10	9 口縁部後			7.5YR6/6	7.5YR6/6	2 mm 以下の石英・角閃石と赤色粒を含む。	台形	タテハケ後 ヨコナナデ				
11	9 口縁部後			7.5YR6/8	7.5YR6/8	2 mm 以下の石英・角閃石を含む。	台形	タテハケ後 ヨコナナデ				
12	9 中位段			5YR6/8	7.5YR7/6	2 mm 以下の石英・角閃石を含む。	台形	タテハケ	指頭圧痕			
13	9 中位段			7.5YR6/8	7.5YR6/8	1 mm 以下の石英・角閃石を含む。	方形	タテハケ	指頭圧痕			
14	9 口縁部	40.2cm	5YR6/6			2 mm 以下の石英・角閃石と赤色粒を含む。			タテハケ後 ヨコナナデ	ヨコハケ		
15	9 口縁部		5YR5/8	5YR5/8		1 mm 以下の石英・角閃石を含む。			ヨコナナデ			
16	9 口縁部		7.5YR6/6	7.5YR6/6		1 mm 以下の石英・角閃石と赤色粒を含む。			タテハケ後 ヨコナナデ			

第1表 横立山経塚古墳出土遺物観察表(1)

番号	測定版	器種	残存部位	11件 色調(外) 色調(内)	黒斑	輪	土	口縫部影態	透孔	突帯形態	外面調整	内面調整	その他
1.7	7	円筒埴輪	口縫部	7.5YR6/8	7.5YR6/6	1mm大の石英・角閃石と、 2mm大の石英を少量、赤 色粒を含む。	直線的に立ち 上がり、端部 付近において 鈍く外反し、 端部を方形に 削める。端部 はナデのため 凹面をなす。				ヨコナデ		
1.8	8	口縫部		5YR6/6	5YR6/6	1mm以下の石英・角閃石を 含む。	純く外反しな がら立ち上が り、端部四角 く削める。端 部はナデのた め四面をな す。			タテハケ後	ヨコナデ	ヨコナデ	
1.9	7	タ	中位段	30cm	7.5YR7/8	7.5YR7/8	2mm大の石英少量、1mm 大の角閃石を多量、赤色 粒含む	方形	方形	タテハケ			
2.0	7	タ	中位段		5YR6/6	5YR6/6	2mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	方形	方形	タテハケ	指頭圧痕		
2.1	7	タ	中位段		7.5YR6/8	7.5YR6/8	2mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	方形	方形	タテハケ			
2.2	8	中位段		5YR6/8	5YR6/8	1mm以下の石英・角閃石を 含む。	1mm大の石英少量、角閃石を 多量、赤色粒を少量 含む。	方形	方形	タテハケ	工具痕		
2.3	8	中位段		5YR6/6	5YR6/6	1mm大の石英少量、角閃石を 多量、赤色粒を少量 含む。	1mm以下の石英少量、角 閃石を多量、赤色 粒を少量含む。	方形	方形	タテハケ	ヨコハケ		
2.4	8	中位段		5YR5/8	5YR5/8	1mm以下の石英少量、1mm 大の角閃石を多量、赤色 粒を少量含む。	赤色粒を含む。	方形	方形	タテハケ			
2.5	8			5YR6/6	5YR6/6	1mm以下の石英少量、角 閃石を多量含む。	1mm以下の石英・角閃石を 含む。	方	方	タテハケ	ヨコハケ		
2.6	8	中位段		5YR6/6	5YR6/6	1mm以下の石英・角閃石を 含む。				タテハケ	ヨコハケ		
2.7	8	中位段		7.5YR6/6	7.5YR6/8	1mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。		台	台	タテハケ	指頭圧痕		
2.8	8	中位段		5YR5/6	5YR5/6	1mm大の石英・角閃石と赤 色粒を含む。		萬台形	萬台形	タテハケ	指頭圧痕		

第2表 横立山経塚古墳出土遺物観察表(2)

種類	固版	器種	残存部位	口径(外)	色調(外)	色調(内)	黒斑	鉛	土	口縫部形態	透孔	空洞形態	外面調整	内面調整	その他
2.9	7	円筒埴輪	中位段	5YR5/6	5YR5/6	5YR5/6	1 mm人の石英・角閃石を含む。	1 mm人の石英・角閃石を含む。	1 mm人の石英・角閃石を含む。	台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	タテハケ	
3.0	7	々		5YR6/6	5YR6/6	5YR6/7	赤色粒を含む。	1 mm人の石英・角閃石と 1 mm大の石英と角閃石と 多量、赤色粒を含む。	1 mm人の石英・角閃石と 1 mm大の石英と角閃石と 多量、赤色粒を含む。	低台形	タテハケ	タテハケ	指頭压痕		
3.1		々	中位段	5YR6/6	5YR6/6	5YR6/8	1 mm人の石英・角閃石を含む。	1 mm人の石英・角閃石と 1 mm大の石英と角閃石と 少量、赤色粒を含む。	1 mm人の石英・角閃石と 1 mm大の石英と角閃石と 少量、赤色粒を含む。	方形	タテハケ	タテハケ	指頭压痕		
3.2		々	中位段	5YR6/8	5YR6/8	5YR6/8	赤色粒を含む。	1 mm人の石英・角閃石を含む。	1 mm人の石英・角閃石と 1 mm大の石英と角閃石と 少量、赤色粒を含む。	偏平な台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	タテハケ	
3.3		々	中位段	7.5YR6/8	7.5YR6/8	7.5YR6/8	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	方形	タテハケ	タテハケ	指頭压痕		
3.4		々	中位段	2.5YR6/8	5YR6/6	5YR6/6	2 mm以下の石英・角閃石を 含む。	2 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	2 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	方形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	タテハケ	
3.5	7	々	中位段	5YR5/6	5YR5/6	5YR5/6	赤色粒少量を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
3.6		々	中位段	5YR6/8	5YR6/8	5YR6/8	赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
3.7		々	中位段	5YR6/8	5YR6/8	5YR6/6	赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
3.8		々	中位段	5YR5/6	5YR5/6	5YR5/6	1 mm人の石英・角閃石、2 mm大の角閃石を少量、赤 色粒を含む。	1 mm人の石英・角閃石、2 mm大の角閃石を少量、赤 色粒を含む。	1 mm人の石英・角閃石、2 mm大の角閃石を少量、赤 色粒を含む。	方形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
3.9		々	中位段	5YR6/8	7.5YR6/8	7.5YR6/8	赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	方形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
4.0		々	中位段	7.5YR6/8	7.5YR6/8	7.5YR6/8	赤色粒少量を含む。	1 mm人の石英・角閃石と赤 色粒少量を含む。	1 mm人の石英・角閃石と赤 色粒少量を含む。	高台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
4.1		々	中位段	7.5YR6/8	7.5YR6/8	7.5YR6/8	赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	1 mm以下の石英・角閃石と 赤色粒を含む。	方形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
4.2		々	中位段	5YR6/6	5YR6/8	7.5YR5/6	2 mm大の石英少量、1 mm 大の角閃石を多量、赤色 粒を含む。	2 mm大の石英少量、1 mm 大の角閃石を多量、赤色 粒を含む。	2 mm大の石英少量、1 mm 大の角閃石を多量、赤色 粒を含む。	台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
4.3		々	中位段	7.5YR6/8	7.5YR6/8	7.5YR6/8	赤色粒を少量含む。	2 mm以下の石英・角閃石赤 色粒を少量含む。	2 mm以下の石英・角閃石赤 色粒を少量含む。	台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
4.4	7	々	基底部	7.5YR5/6	7.5YR5/6	7.5YR6/8	赤色粒を含む。	2 mm以下の石英・角閃石赤 色粒を含む。	2 mm以下の石英・角閃石赤 色粒を含む。	台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	
4.5		々	基底部	31cm	7.5YR6/8	7.5YR6/8	赤色粒を含む。	2 mm以下の石英・角閃石赤 色粒を含む。	2 mm以下の石英・角閃石赤 色粒を含む。	台形	タテハケ	タテハケ	ヨコナダ	指頭压痕	

第3表 横立山経塚古墳出土遺物観察表（3）

## ② 後円部（第3トレンチ）出土埴輪

9は円筒埴輪口縁部、10・11は同口縁部段、12・13は同筒部である。9の口縁部の形態は端部を四角く納めている。突帯の形態は全て台形をなし、接着については上段に比べて下段が粗雑で、器体との間に隙間がある。13は方形透かし孔の横側である。外面調整は1次のタテハケのみが基調であるが、10・11の口縁部段のタテハケについてはきれいに撫で消されている。

## ③ 表面採集および前方部廃石中出土埴輪

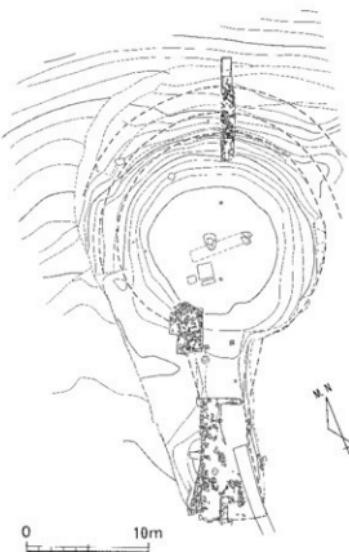
14～18は円筒埴輪口縁部、19～42は同筒部、43・44は同基底部である。径がわかるものとして14で40.2cm、19で30cm、44で31cmであった。口縁部の形態として多くが、鈍く外反気味に立ち上がり、端部を四角く納める。端部は強いナデのため凹面をなす。突帯の形態については大部分が台形をなし、接着については突帯下端の接合が上端に比べ粗雑であった。だが、27・35のように上端だけではなく下端の接合もきれいに行われているものもあり、それらは上端下端の強いナデ付けのために端面が強い凹面をなす。19～25で方形透かし孔が認められ、19～21からはこの方形透かし孔の上端と下端が突帯のすぐ近くまで施されていたことがわかるが、全形は不明である。

外面調整として1次調整のタテハケのみが基調であるが、口縁部においてはタテハケをきれいに撫で消している。だが14においてはナデが粗雑であるためタテハケが残る。また、中位段においてはヨコハケも見受けられ、36では2次調整としてヨコハケが施される。方形透かし孔の段の調整であるがタテハケのものが多いため、23においてはタテハケではなくヨコハケが施されている。内面調整としては基底部において明瞭な指頭圧痕を残すほかは、中位段などにおいて指頭圧痕やナデの跡を残すのみである。

横立山経塚古墳の埴輪は突帯の接着に際しては上端のみをきれいに撫で付けるものと、下端もきれいに行うものがある。また外面調整として1次調整のタテハケだけでなく、口縁部においては2次調整としてナデが、中位段においてはヨコハケが施されているものがあった。このことから少なくとも2パターンの調整方法の埴輪が存在したのではないかと考えられる。また、この埴輪の胎土をみると、角閃石を多量に含み、下川津B類様式に極めて近似した素地粘土を使っていることがわかる。

## 8まとめ

以前から横立山経塚古墳は、古墳の南東部及び南西部を後世の開墾により大きく削平された積石塚<sup>(2)</sup>前方後円墳であるといわれてきた。しかし今回の測量調査および確認調査の結果、削平されたと考えられてきた前方部は、本来の墳丘の上に後円部盗掘時に生じた積石が多量に盛られたために、



第20図 横立山経塚古墳復元図

正確な前方部の形が判断できなかつたことによるもので、前方部の廃石を除去した段階で本来の墳丘を確認することができ、当初想定されていたほどの削平が古墳に及んでいないことが判明した。以下今回の試掘調査で判明した点を列挙しまとめとしたい。

#### (1) 古墳の形態、規模

今回の発掘調査及び測量調査では、古墳の東側において確認調査を行うことが出来なかつたため、古墳東側の情報が十分ではないが、各トレンチ及び墳丘測量から得られた情報をもとに古墳の形態及び規模について復元を行つた(第20図)。

前方部及びくびれ部に設定したトレンチで古墳の裾石が確認できたことから、古墳の西側での墳形は、くびれ部から前方部に向かって一旦狭くなり、その後直線になる、前方部トレンチ端から4.5m南で緩くバチ形に開く前方部であることが判明した。対する東側についての墳裾は、前方部東隅を現在の参道東あたりに設定し、コンクリートの参道東側のラインにつづき、前方部トレンチ北端から東側標柱の東にあるコーナーに下げていくと西側の前方部からくびれ部の墳形に近くなる。後円部東側の墳裾は畑との地境がほぼ上段の裾であると想定すれば西側との違和感はない。西側と同じ墳裾の状況を想定するならば、西に比べ東側に傾斜する地形からしても、後円部中央あたりから下段の裾が始まるはずであるが、ここでは存在しない。後円部北東に突き出る形の積石の盛り上がりは、現段階では本来東側に造られていた東下段墳裾を北側に移動したためにできたものと想定しておきたい。

後円部に設定したトレンチによって古墳の裾と上段の裾が確定し、2段築成の古墳であることも判明した。後円部に対して東西のトレンチは設定しなかつたものの、墳丘測量図西側の状況から下段である墳裾は後円部中央あたりまで存在し、それより南には延びないことは確実である。

昭和55年の測量調査の成果から後円部墳頂から3m下ったところに幅2mの段が存在し、それから北に0.8m下ることから、この部分を一段目とし、これよりも上側を2段目としているが、今回の確認調査では各段の平坦面は0.8mであることが判明したため、今回確定した古墳裾より外側に存在する積み方の粗い石積みは自然のものとは考えられず、墳丘内の段に比べて傾斜が緩くなる点、傾斜の範囲が広い点などから墳丘外の段築である可能性が考えられる。

以上の成果から墳丘規模を推定してみると

全長 33.5m, 前方部長さ 16m, 前方部幅約 6m (4.5m),

前方部高さ 1m (0.8m), くびれ部幅約 8m (6.5m), 後円部径約 20m,

後円部高さ約 2.7m (2.2m)

の規模の前方後円墳が復元できる。 ( ) の数値は発掘調査で得られた残存値

横立山経塚古墳は讃岐の古墳の特徴の一つである積石塚前方後円墳であるに加えて、伝統的な前方後円墳の立地状況である尾根先端部の傾斜地を選び、前方部は山側に後円部は平野(海)側に向か、古墳構築前に地表面を水平に均さないために墳丘基底は傾斜する(前方部からくびれ部まではほとんど傾斜なし、傾斜するのは後円部)という特徴を持つ他、棺主軸を厳密に東西方向に設置する、低い細身の前方部が後円部につくなど伝統的な特徴を持った前方後円墳である。古い伝統をもつ古墳でありながら、新しい様相をもつ埴輪の出土が示すとおり、狭い前方部はバチ形に開くが、古い段階の前方後円墳に比べ前方部のバチ形の開きは緩い。積石塚古墳でありながら前方部や後円部の一部では、墳丘内部は盛土で構築されている部分も認められるなど、讃岐の古墳造営における伝統が少しづつ変化していく状況が当古墳からも認められる。

### (2) 出土状況からみた埴輪の配置について

試掘調査の前に行った測量調査の時点で、後円部の墳頂近くの斜面において埴輪の口縁部や底部、体部片を表探した。つづくくびれ部及び後円部に設定した第2、3トレンチからは前述のとおり、各10片程度の埴輪片しか出土しておらず、いずれも細片に近く、全容の判明するものは少ない。また前方部に設定した第1トレンチからは、前方部に盛られていた廃石中から埴輪片の出土はあったが、純粹な前方部出土の埴輪片はない。以前から器財形埴輪の出土が伝えられているが、今回出土した埴輪のうち底部の破片で弧を描かず直線になるものが認められるが、器財形埴輪に比べ器壁が薄く形態や調整方法が異なり、他の円筒埴輪の底部片と変わることろはないことから、現段階では梢円形の埴輪が存在する可能性は考えられるものの、器財形埴輪については、今回の確認調査から出土した埴輪の中には認められない。

埴輪の出土量は少いものの、裾部に比べて斜面部に埴輪片が多く認められる。表探でも同様に墳頂近くの斜面で採集できる。前方部に盛られていた廃石は本来、後円部墳頂にあったものが盜掘時に移動してきたものと考えているが、その廃石中からもコンテナ2箱分の埴輪片しか出土しなかった。この他、表探品が下笠居中学校に保管されているが量は多くない。

以上の出土状況及び出土量からみた埴輪の配置は、墳裾ではほとんど埴輪片が認められなかつた上に、底部の破片が見られなかつたことから墳裾に置かれた可能性は殆ど考えられない。逆に後円部からくびれ部にかけての斜面では埴輪片が出土したり、表探されることから、本来は、後円部の墳頂に置かれていたものが倒壊し、斜面に堆積したものと考えられる。その場合、石室周辺にのみ配置されていたものか、後円部墳頂の縁辺部に配置されていたものかは今回の確認調査では確定できなかつた。

### (3) 古墳の年代観について

埴輪の項でも述べているが、今回確認できた円筒埴輪片や過去に採集され下笠居中学校に保管されている円筒埴輪片には、突帶は下垂気味で下端の接合があまい点、外側調整は1次タテハケを貴重に部分的にA種ヨコハケが加わり、内側調整はユビ押さえ・ナデ・ハケ調整を施す点、下川津B類土器と呼ばれる土器と同様な角閃石を多量に含む胎土をもつ点などの特徴が見られる。このような特徴をもつた埴輪は、石清尾山古墳群の姫塚古墳、石船塚古墳などに見られる。このうち姫塚古墳出土の埴輪は外側調整は1次タテハケのみでやや古い様相を示す。石船塚古墳出土の埴輪は外側調整は1次タテハケ調整を基調にするものの、A種ヨコハケが施される等共通点がある。加えて石船塚古墳は石清尾山古墳群中の積石塚でも最も新しい段階に編年される古墳で、主体部に鷺の山産の削り抜き式石棺をもつなど新しい要素が多い。石船塚古墳は古墳集成の4期の古いところに編年されており、出土した埴輪片に共通点が多いことから、横立山経塚古墳も同様に集成4期の古い段階に編年できる。<sup>(4)</sup>このことは積石塚古墳で狭い前方部に加え、バチ形に開くという古い伝統をもちながら、そのバチ形はかろうじて緩く開くという平面形態ともあってくる。

## 第2章 史跡天然記念物屋島基礎調査事業

### 1. 平成7～10年度調査概要

史跡天然記念物屋島基礎調査事業は、平成7年度から歴史的に重要な史跡が多く所在する屋島において、その正確が明らかでないものについて確認調査を実施している。確認調査の進展によって従来不明な部分が多かった屋島について徐々にその性格が明らかになりつつある。以下各年度の概要を述べる。

#### (1) 南嶺地区（平成7, 8, 9年度）

##### ① 平成7年度調査

屋島寺の北側で室町時代（14世紀末～15世紀初頭）の集石遺構を3箇所確認した。このうち2箇所については、円形を呈し、集石にまとまりをもつことから墓の可能性が考えられる。

##### ② 平成8年度調査

平成7年度調査地と屋島寺の間の部分において土壘遺構の調査を行った。土壘は幅3m、高さ1mの規模をもつ。土壘の内部構造は両裾に安山岩を置き、石を積んでいる状況が確認できた。土壘中からは室町時代（14世紀末～15世紀初頭）の遺物が出土したことから、この土壘は屋島寺の寺域を画する土壘と考えられる。

##### ③ 平成9年度調査

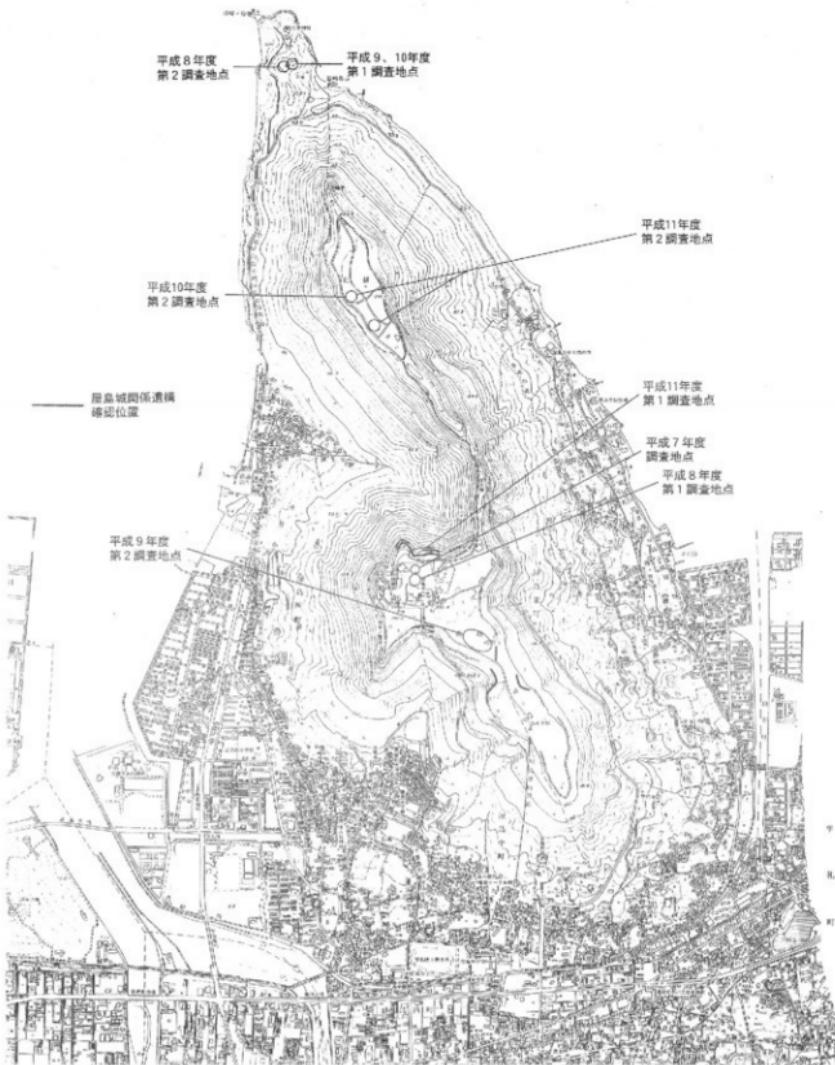
屋島寺南東部南嶺最高所付近で確認調査を行い、柱穴と考えられるピットを確認した。ピットの一部より備前焼壺底部が出土したことから、これら確認した柱穴は室町時代のものと考えられる。また、調査区内の数カ所で弥生時代中期頃の土器包含層も確認した。

#### (2) 長崎鼻古墳（平成8, 9, 10年度）

確認調査の結果、全長45m、後円部径28m、後円部の高さ5m、前方部最大幅20m、前方部の高さ3.6mくびれ部の幅1.5, 6mの規模をもつ柄鏡形の前方後円墳であることがわかった。墳丘外面には前方部前面2段、前方部側面から後円部にかけては3段の葺石を、テラスでは小礫を敷き詰めている状況を確認した。後円部の盗掘状況を確認するために一部掘り下げたところ、赤色顔料で塗られた阿蘇熔結凝灰岩製の舟形石棺を確認した。

#### (3) 北嶺地区（平成10年度）

伝千間堂と呼ばれている湿地の西側で、湿地を取り囲むと考えられる石列を確認した。石列は多い部分で3段程度積んだ部分も確認できる。周辺から出土した土器より12世紀末～13世紀初頭の時期のものと考えられる。



第21図 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査地位置図

## 2. 平成10年度発掘調査 第2調査地点（北嶺）

- (1) 所在地 高松市屋島西町（国立公園内）
- (2) 調査期間 平成11年3月1日～平成11年3月30日
- (3) 調査面積 約60m<sup>2</sup>
- (4) 発掘調査の概要

屋島北嶺山上平坦地の中央部に所在する湿地の西側において遺構の確認調査を行った。北嶺山上の中央部に所在する湿地については、昭和55年度の屋島城跡関係の確認調査でトレンチ調査を実施しているが、トレンチが狭かったこともあり遺構の確認には至っていない。調査前の地形の観察から、湿地の外側に土手状の高まりが観察でき、何らかの遺構が埋没している可能性が考えられたことから、土手状の高まりに直交する形で東西方向に南北2m、東西4.0mのトレンチを設定した。

発掘調査の結果、土手状高まりの下部から安山岩を利用した幅2mの間隔をもつ石列を確認した。石列を確認した範囲を中心に北側にトレンチを拡張した結果、石列は北側に延びており、まとまりのよい西側の石列は長さ4mほど直線に並んでいることが確認できた。西側石列のうち、残りのよい部分では安山岩を3段積んでいる状況も確認できた。

出土遺物は石列中および周辺から黒色土器、瓦器、土師器の楕の破片などが出土している。形態等の特徴から12世紀末から13世紀にかけてのものと考えられる。



写真10 トレンチ完掘状況（西から）



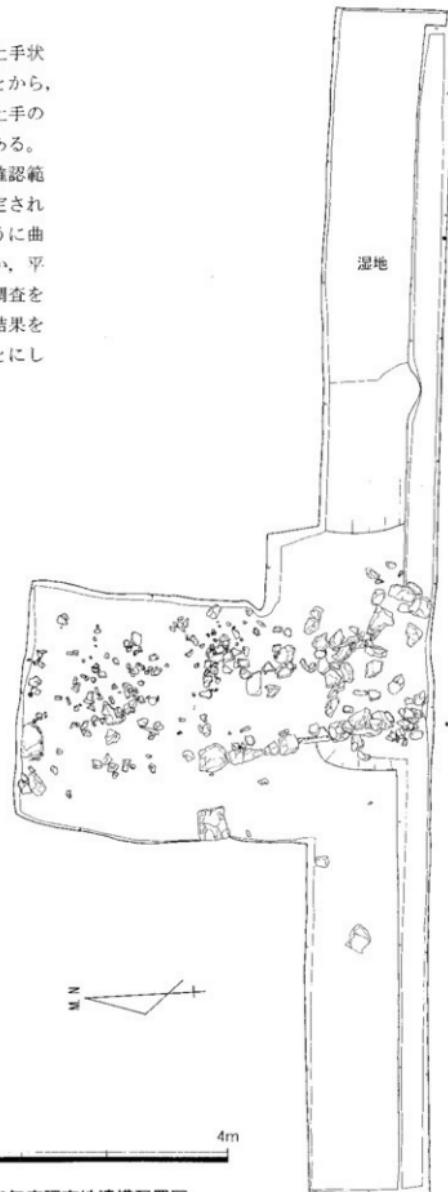
写真11 石列検出状況（南から）



第22図 平成10年度調査地点出土遺物実測図

### (5) 小結

確認した石列は湿地を巡る土手状の高まりの下部で確認したことから、湿地を巡る土手の下部遺構（土手の補強材）と考えて良さそうである。今回の発掘調査区の関係から確認範囲が南北6、5mの範囲に限定されたため、石列が湿地を巡るように曲線を描くのか、直線に並ぶのか、平成11年度に南北延長部分の調査を予定していることから、この結果を待って石列の評価を考えることにしたい。



第23図 平成10年度調査地遺構配置図

### 3. 長崎鼻古墳（平成8年度 第2調査地点、平成9、10年度 第1調査地点）

(1) 所在地 屋島西町 屋島国有林26林班は小班

(2) 調査期間 平成9年3月3日～平成9年3月31日

平成10年2月9日～平成10年3月31日

平成11年1月18日～平成11年3月30日

(3) 調査面積 平成8年度90m<sup>2</sup>、平成9年度235m<sup>2</sup>、平成10年度128m<sup>2</sup>

#### (4) 発掘調査の概要

発掘調査は平成8年度から始まり、平成10年度までの3カ年にわたり確認調査を行った。平成8年度は古墳西側の通称鯨の墓が所在する丘陵部の確認調査に関連して、前方部の前端部にトレンチを入れ葺石が良好な形で残存していることを確認した。平成9年度は前方部の状況を確認するためのトレンチ調査を中心に行い前方部の規模が判明した。平成10年度はくびれ部から後円部にかけてのトレンチ調査を行い全体の状況がほぼ判明した。

#### (5) 古墳の規模

発掘調査の結果、全長4.5m、後円部径2.8m、後円部の高さ5m、前方部最大幅2.0m、前方部の高さ3.6m、くびれ部幅1.5.6mの柄鏡形の前方後円墳であることが判明した。<sup>(5)</sup>昭和59年に地元出身大学生有志によって古墳の地形測量が行われた測量結果では、古墳の全長4.2.8m、後円部径2.2.3m、後円部高さ4m、前方部前端幅1.3.6m、前方部高さ約2m、くびれ部幅1.1.2mの規模の古墳であると推定されたが、調査の結果、一回り大きな古墳であることが判明した。

この差は、当古墳が幅の狭い丘陵に高くつくられていることから、長年の風雨による崩落で古墳に多量の上砂、石が堆積したことが原因である。これを裏付ける調査結果として、最も埋没していたくびれ部墳裾では1m程度の堆積があった。また前方部では西側丘陵をカットしてつくられており、西側斜面の崩落した土砂で同様に前方部は深く埋没していた。

#### ①主体部

主体部は竪穴式石室1基で後円部の墳頂部を利用して、墓壙を掘削し石室を構築していることが判明した。石室は長軸6m、短軸3.5mの範囲に安山岩の板石で覆っている状況が確認できた。石室は明治初年に盜掘されたことが『木田郡誌』に記載されており、トレンチ内で盜掘時の埋め戻しと考えられる赤色顔料のついた玉砂利と土砂を除去する途中で石棺の破片2点を確認した。上記の『木田郡誌』に石棺を破壊した記録があることから、出土した石棺の破片2点は盜掘時に破壊された石棺の破片であると考えられる。

主軸部の状況は主軸に平行する形で設定したトレンチで確認できた南半部の状況と石棺上部にできた空洞部分を利用し、かろうじて石棺の形態、規模等が推定できる状況であった。この為、以下に報告する成果は、今後の調査によって変更する可能性が高い。

主体部の構築状況は、墓壙床面を平坦にし、4.0cmの厚さで玉砂利を敷く。石棺の深さと玉砂利の深さから石棺が安置される部分は玉砂利は薄く敷かれていることが想定でき、断面による観察では、棺身の半分程度は玉砂利に埋没した状態になる。玉砂利の上部は厚さ5cm程度の安山岩板石を2石積み上げている。この部分までは構築当初の位置を保っているものと考えられるが、これより上部は玉砂利と埋め戻された土が混在している状況が観察できたことから、盜掘時の擾乱により原位置を保っていないものと考えられる。確認された石棺は一部が露出しているのみで詳細は不明であるが、天井石の傾斜具合から全長約250cm、幅約100cm、棺蓋の高さ約20cm、棺身の高さ約55cmの規模をもつものと想定できる。扁平な棺蓋には側縁部に扁平な突起が2ヶ所確認でき、側壁と棺の隙間か

らの観察から、もう1ヶ所確認できることから側縁部には3箇所の突起が存在する。反対側にも3ヶ所の突起が想定できることから棺蓋には6ヶ所の突起が想定できる。一方、棺身の受け部には幅7cmの舟べり状突帯が認められ、底は半円形に近い形状をする。舟形石棺には赤色顔料が全域に確認できる。

#### ②外部施設の状況

各トレンチ調査の結果、前方部側面から後円部にかけて3段築成で築かれていることが判明した。各段の高さは下段が0.9m、中段が1.5m、上段が1m（くびれ部の計測値）である。各段の間は幅0.8mのテラスが存在する。各段の裾石は他の葺石よりも大振りのものを使用し、裾を明確にしている他、各テラスは安山岩の小礫を敷いている。また、葺石を構築する際の作業の基準となる葺石列（目通り）を確認した。基準となる葺石列はその他の葺石に比べやや規模の大きなものを使用し、葺石列の上部は各テラスの上まで乗り上げるように造られていた。

#### ③出土遺物について

今回の発掘調査の中心が古墳の範囲確認であったため、出土遺物は極めて少ない。北側くびれ部の上段と中段の境のテラス付近で小型丸底壺1個体分の口縁部から体部片を確認したにとどまる。同時期の古墳に多い埴輪は今回の調査では確認していない。

#### （6）まとめ

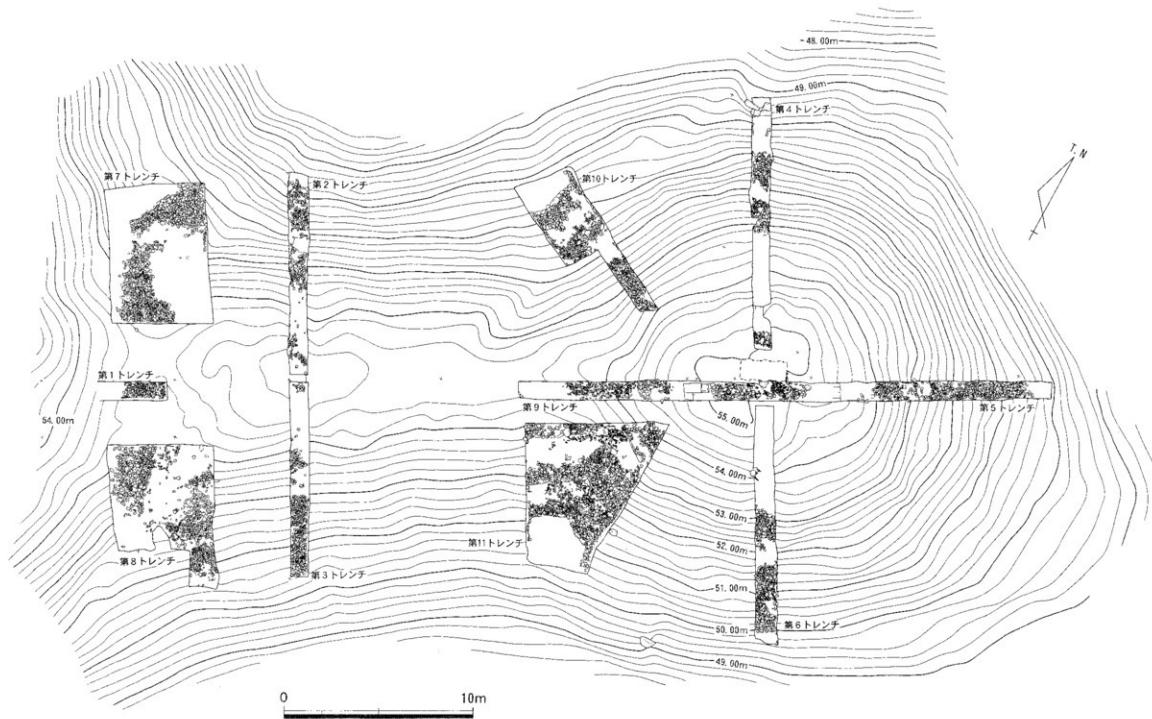
今回の調査で判明したことを列記しまとめとしたい。

① 板石積みの天井部石の下に存在した石棺は、阿蘇熔結凝灰岩製の石棺で、石棺の形態から北肥後産で菊池川流域で造られた石棺であることが判明した。<sup>(7)</sup> 北肥後産の石棺はこれまで県内で2例確認されているが、これよりも古く県内では最古の5世紀初頭頃の北肥後産の石棺であることが判明した。

② 当古墳は発掘調査の結果、全長4.5mの前方後円墳であることが判明したが、古墳を造る際に墳丘を3段に築いていること。同規模の古墳としては県下で最も高い墳丘高を有することが判明した。この理由は、当古墳が屋島の先端長崎鼻に位置し海を意識した立地を示すことに加え、古墳全体が石で覆われていることもあり、海上からでもその位置が容易にわかるように造られていることがわかる。

③ 補石を葺く際の基準となる葺石列（目通り）を県下で初めて確認した。一部分の確認であったが、葺石列の間隔は1mである。

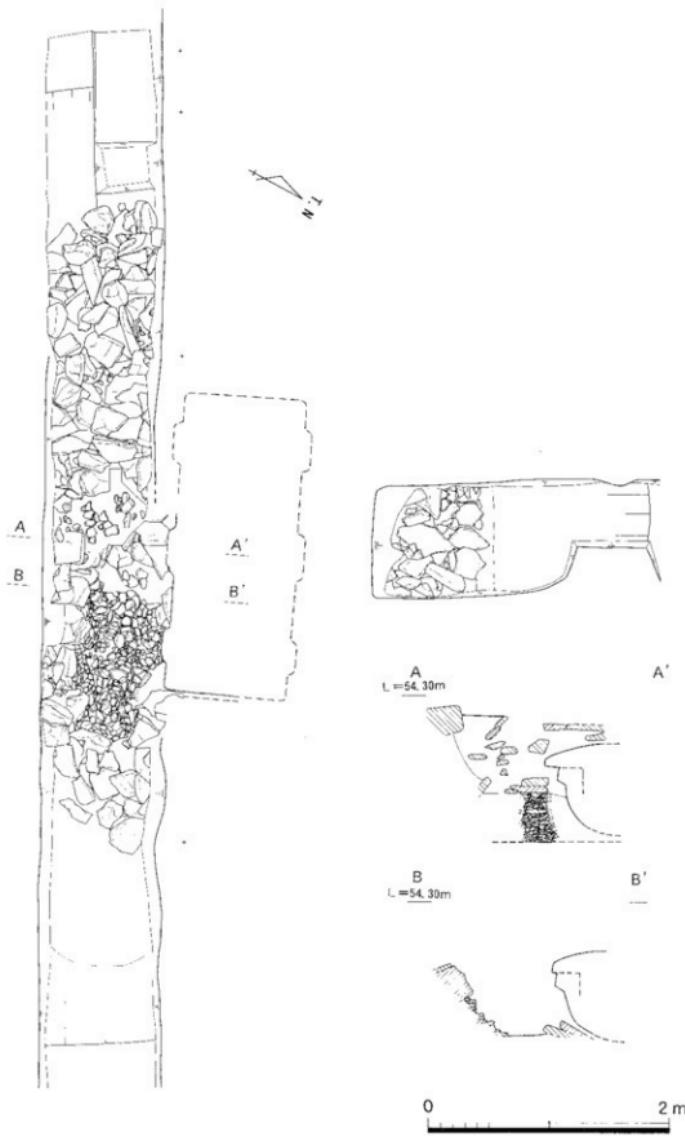
以上のような結果から、今後詳細な検討を行わなければならないが、これまで県内で確認されていた阿蘇熔結凝灰岩製石棺の搬入は、觀音寺市丸山古墳の5世紀中葉であつただけに、当古墳資料はそれよりも遡る資料となることは確実である。当古墳の評価を行う場合、主体部の舟形石棺から九州との関係、在地の同時期の古墳に比べ墳丘からの出土遺物が少ない点、墳丘の築造形態の違いなどから近畿との関係など広い視野に立った検討が必要である。



第24図 長崎鼻古墳墳丘測量図



第25図 第10トレンチ平面図



第26図 主体部トレンチ平・断面図

#### 4. 平成11年度調査

平成7年度から発掘調査と平行して分布調査を行っていたが、平成10年2月に南嶺西側の緩斜面から急斜面に変化する変換点において、南北200mの範囲に斜面に石を積んだ外郭線が確認された。これを契機として、平成10年度は市の単費で古代屋島城の外郭線を再度、確認するため分布調査を行った。しかし限られた日数と予算の中では外郭線の確認を中心とする分布調査に終始した。この為、平成11度は、年度当初の4~5月にかけて分布調査を実施した。その結果、南嶺東斜面の標高270m付近において、南嶺の北、西斜面で確認している外郭線と考えられる遺構と同様な遺構を確認した。正確な調査を行っていないため、詳細は不明であるが、遺構は南北50m弱の狭い谷を塞ぐようにつくられており、石積みの裏側に幅2m程度の平坦面が存在することから、人工的な斜面の改変が行われていると考えられる。確認できた平坦面は、南端は断崖に取り付く形で終わるという他の外郭線と同様な構造をする。斜面裏側の平坦面は北側断崖の上にも存在し、徐々に幅を狭め消滅する。斜面前面の大部分は土砂によって埋没していると考えられるが、平坦面前面の石積みは20cm程度の安山岩が高さ2m程、乱雑に積まれている状況が確認できる。石積みは北斜面、西斜面で確認されているものに比べ石材が小振りである。平坦面前面の石積みの前面には、幅は狭いものの平坦面が存在することから、現在の状況は前面の石積みが崩落し、裏込めの石材が露出している可能性も考えられる。この遺構も断崖と断崖が途切れる部分につくられていること、山頂近くである標高270m付近の斜面につくられていること、山頂側に幅2mの平坦面、その前面の斜面に石積みが存在するという共通点をもっていることから、この遺構も外郭線の一部であるといえる。

屋島の南嶺については分布調査の結果、急峻な断崖の上部には人工構造物は存在しないことを確認している。逆に断崖が途切れる部分には、必ず人工的な遺構が存在し、その構造、立地条件には多くの共通点が見いだされる。今回の確認によって屋島城の南嶺外郭線は、断崖と人工構造物をうまく組み合わせることによって構成され、全周している可能性が極めて高い。今後、正確な位置の確定、詳細な遺構図の作成、外郭線内部の構造調査を進め時期の確定を行っていきたい。

この他、分布調査では屋島西町の浦生地区に所在する浦生遺跡で遺物の採集を行った。以前から浦生遺跡では古墳時代の製塩土器を中心とする土器が多く採集されていることが知られている。今回、分布調査の一環で鶴羽神社本殿周辺を踏査したところ、本殿裏側を中心に製塩土器を中心とする土器の包含層が露出していることが判明した。本殿の前面では土器の散布が見られないことから包含層の広がりは、本殿裏側に中心があるのか、本殿前面は傾斜のため包含層が埋没しているのか、現在のところ不明である。採集した遺物は土師器（小型丸底壺、製塩土器、飯鮒壺）、須恵器（杯身）、弥生土器等があり、大半が製塩土器であるが、大型のものと小型のもののが存在する。表採した製塩土器の(8)時期は6世紀末から8世紀中頃の製塩土器が大半を占め、一部古墳時代前期に遡るものも含まれる。遺跡の長期間の継続が想定できる。

屋島西町浜北では、遺跡分布図には記載のあるものの、これまで所在が不明であった円墳である浜北1号墳と前方後円墳である浜北2号墳を再度現地で確認することができた。小竹一郎氏の両古墳確認時の位置関係からみた浜北1号墳の想定される位置には、隆起が少なく、現状では、かろうじて南北約10m、東西約5~6mの範囲で古墳状の隆起が観察される程度である。以前採集されている土器が古墳に伴うものであるとすれば、古い段階の古墳であるといえる。また、浜北2号墳は全長30m弱の前方後円墳である。後円部からくびれ部がほぼ水平につくられており墳形が明確であるが、前方部は山側に向けるためか、前端部が不明瞭である。くびれ部はやや幅が広く前方部はそれほどバチ形に広がらないようである。墳形、立地状況からすれば1号墳より新しいものであろう。浜北2号墳

写真12

南嶺東側外郭線現況  
(北から)



写真13

南嶺東側外郭線現況  
(南から)



写真14

東側外郭線斜面前面石積み



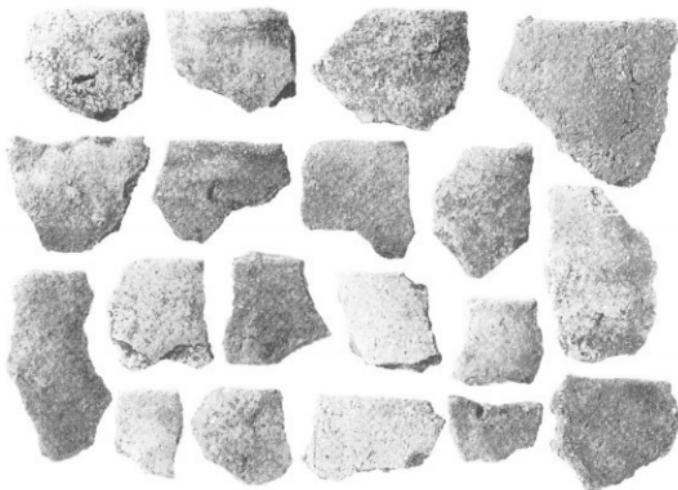


写真15 浦生遺跡表探遺物

は幅の狭い丘陵部分に存在する古墳としては、残存状況は良好である。

一方、発掘調査は平成12年2月8日から北嶺部分の発掘調査を開始した。調査地は平成10年度の調査地に直交するようにトレンチを設定し、昨年度確認した石列の広がりを確認する為の調査を行っている。これより南側でもトレンチを設定し、遺構の確認を行っており、9世紀後半～10世紀前半にかけての遺物が多く確認されている。詳細についてはその概要を12年度に報告する予定である。

南嶺については北斜面に存在する外郭線周辺の地形測量と平行して外郭線にトレンチを設定し、内部構造の確認を行っている。この成果についても概要を12年度に報告する予定である。

(※注)

- (1) 重要遺跡確認調査の一環として測量調査が実施されている。香川県教育委員会「横立山経塚古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和54年度』1980. 3
- (2) 讃岐國下笠居村中山塚として外形略測図が公表されており、その中で墳丘の復原が行われている。『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部 1933. 5
- (3) 讃岐地方における古墳時代前期の前方後円墳の特徴については下記の文献にまとめられている。  
大久保徹也「香川県石清尾山積石塚墓群」『季刊考古学』第65号 1998. 11  
大久保徹也「首長墓から見た讃岐地域の動向－地域的結集と解体 首長層の階層分化－」『シンポジウム「古墳時代における日向の地域性」古墳の形と分布から何がわかるか』資料集 宮崎県埋蔵文化財センター 1999. 10など
- (4) 墳輪の編年観については下記の文献による  
大久保徹也『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第25冊 中間西井坪遺跡I』香川県教育委員会他 1996. 11
- (5) 森下浩行 山本英之「高松市長崎鼻古墳の測量調査報告」『香川考古』第2号 香川考古刊行会 1993. 12
- (6) 木田郡教育部会『木田郡誌』1940. 1
- (7) 宇土市教育委員会 高木恭二氏の御教示による。
- (8) 徳島文理大学 大久保徹也氏の御教示による。
- (9) 『高松市文化財（史跡）分布調査報告書』所収

# 図 版

図版1 横立山経塚古墳



1. 横立山経塚古墳遠景  
(南から)



2. 横立山経塚古墳遠景  
(北から)



3. 前方部調査前状況

図版2 横立山経塚古墳

1.くびれ部調査前状況



2.後円部調査前状況



3.後円部竪穴式石室盗掘坑



図版3 横立山経塚古墳



1. 前方部積石検出状況（北から）



2. 前方部積石検出状況（拡大）

図版4 横立山経塚古墳

1. 前方部トレンチ内  
安山岩検出状況



2. 前方部トレンチ内土層



3. 前方部東側確認石列



図版5 横立山経塚古墳



1.くびれ部積石検出状況（南から）



2.くびれ部埴輪出土状況

図版6 横立山経塚古墳

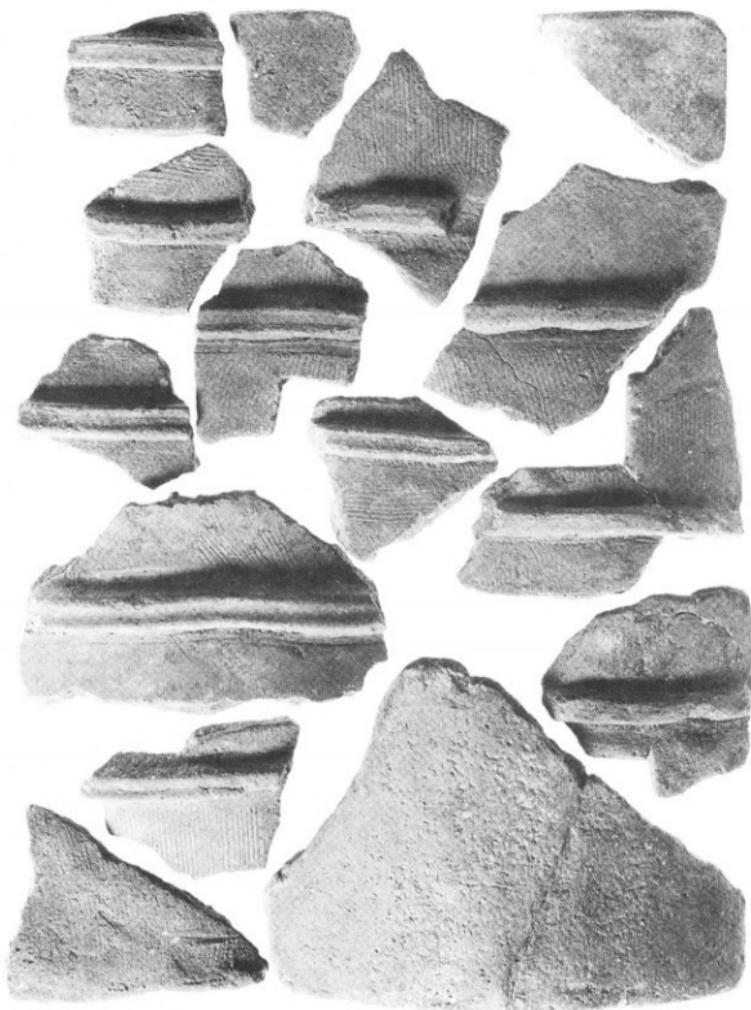
1.くびれ部積石検出状況  
(北から)



2.後円部積石検出状況  
(北から)



図版7 横立山経塚古墳



横立山経塚古墳出土埴輪

図版8 長崎鼻古墳

1. 前方部北側葺石  
検出状況（北から）



2. 前方部北側葺石  
検出状況（南から）



3. 前方部南側葺石  
検出状況（西から）



図版9 長崎鼻古墳



1. 南側くびれ部  
葺石検出状況（南から）



2. くびれ部中段葺石状況



3. 北側くびれ部  
葺石検出状況

図版10 長崎鼻古墳



1. 前方部南側侧面葺石検出状況



2. 後円部南側葺石検出状況



3. 後円部北側葺石検出状況



4. 後円部東側葺石検出状況

図版11 長崎鼻古墳



1. くびれ部墳頂敷石検出状況



2. 後円部主体部トレンチ盗掘坑除去状況



3. 主体部石棺検出状況

報告書抄録

ふりがな 書名	たかまつしないいせきはくつちょうさがいほう 高松市内遺跡発掘調査概報							
副書名	平成11年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第45集							
編集者名	山元 敏裕							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2636							
発行年月日	平成12年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村	二 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
なかさきのほな 長崎鼻 古墳	たかまつしやしま 高松市屋島 屋島国有林26 林班は小班	37201		34° 22' 45"	134° 5' 46"	H11.1.18 ~ H11.3.30	128 m <sup>2</sup>	基礎調査
しせきてんねんき 史跡天然記 れんぶつやしま 念物屋島	たかまつしやしま 高松市屋島 西町 (国立公園内)	37201		34° 22' 7"	134° 6' 0"	H11.3. 1 ~ H11.3.30	60 m <sup>2</sup>	基礎調査
ゆらなんばら 由良南原 遺跡	たかまつしゆら 高松市由良 町339番地 ほか	37201		34° 16' 45"	134° 6' 22"	H11.7.26 ~ H11.8.23	130 m <sup>2</sup>	市営住宅建設
たなかわら タヌキ塚	たかまつしまだ 高松市前田 東町339番 地1	37201		34° 17' 44"	134° 7' 29"	H11.8. 2 ~ H11.8. 3	64 m <sup>2</sup>	圃場整備
こうやねいこ 高野廃寺	たかまつしかわしま 高松市川島 本町728番 地	37201		34° 16' 18"	134° 5' 5"	H11.10.12 ~ H11.10.15	51 m <sup>2</sup>	薬師堂 建替
ひかしなかすし 東中筋 遺跡	たかまつしきら 高松市桜町 二丁目14番	37201		34° 19' 26"	134° 3' 15"	H11.10.26 ~ H11.10.28	90 m <sup>2</sup>	道路建設
ひやくさんちうり 日山山頂	たかまつしみたに 高松市三谷 町2007番地 22	37201		34° 16' 14"	134° 3' 55"	H11.11.17	64 m <sup>2</sup>	展望台 建設
よこててやもきょうづ 横立山經塚 古墳	たかまつしなやま 高松市中山 町423-62番 地ほか	37201		34° 21' 3"	133° 57' 51"	H11.11.17 ~ H11.10.	84 m <sup>2</sup>	祠建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
長崎鼻古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳、葺石 竪穴式石室	阿蘇熔結凝灰岩製 石棺、土師器				
史跡天然記 念物屋島		平安時代	石列	黒色土器、土師器 瓦器				
由良南原遺跡	集落	鎌倉時代	溝、土坑、柱穴	須恵器、土師器				
タヌキ塚	塚	江戸時代	積石	弥生土器、須恵器 瓦、埴輪				
高野廃寺	寺院	江戸時代	礎石、溝、土坑	陶磁器				
東中筋遺跡	生産	中世	上坑、柱穴	弥生土器、土師器				
日山山頂		平安時代	なし	須恵器				
横立山經塚 古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳、積石 葺石、竪穴式石室	埴輪				

## 高松市内遺跡発掘調査概報

平成11年度国庫補助事業

平成12年3月31日発行

○編集 高松市教育委員会

○発行 高松市番町一丁目8番15号

○印刷 深河端商店会